
キズナの探険録～隠された闇の丘～

みぞれ雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キズナの探険録〜隠された闇の丘〜

【Nコード】

N4040I

【作者名】

みぞれ雪

【あらすじ】

“ 絆の冒険記 ” 番外編その2です。

今回は、あのプラネット先生の “ ポケダン 空の探険記 ” とコラボさせていただいたお話です！

第1話：始まり（前書き）

皆様こんにちは！

“絆の冒険記”執筆中の、アホ作者（byセナ）、みぞれです！
様々な事情がありまして、コラボが番外編という形になってしまいました
ですが、お許し下さいませ……（汗）

セナ

「この小説については、設定集“キズナの救助隊レポート”でもざつと説明をしたので、よろしければそちらにも目を通してくだされば幸いです」

……あれ？

キミってこんなに言葉遣いいい子だったっけ……（汗）？

セナ

「なつ（怒）！？

敬語の使い方くらい知ってらあ！！

……そのクソザルと違ってww」

ホノオ

「オレが何だって（怒）？」

ヴァイス

「わわっ！喧嘩はやめて、本編に行こうよ（汗）！」

それでは、私の人生初のコラボ（大袈裟？）、始まりです！

第1話：始まり

「よし、今日も依頼成功！」

“聖なる森”に響き渡る、弾んだ声。

救助隊“キズナ”のリーダーで、人間からゼニガメになってしまった少年、セナの声だった。

彼と共に森を歩くのは、ヒトカゲのヴァイスに、セナと同じく元人間のヒコザル、ホノオ。それから、ポツチャマのシアン。

皆、救助隊キズナのメンバーで、森の中を元気に歩いている。

ついさつき、『聖なる森に住むパチリスに“バクスイ玉”を配達する』という依頼を終え、これから基地である“サメハダ岩”に帰ろうとする彼ら4人。

冒険の始まりを告げる出逢いは、目前に迫っていた……。

「……………ん？」

不意に、セナが前方に目を凝らし、疑問の声を洩らす。

「どっしたの？セナ」

不思議そうにセナを見つめ、問いかけるヴァイス。
ホノオとシアンの視線も、セナに向けられた。

「……だ、誰か……。誰か、倒れてる!!!」

自らが確認したその姿に向かって、セナは駆け出した。

「あ、おい待てよ!」

ホノオがそう言うと、急いでセナの後を追う3人。

「うわぁ、酷い怪我!」

徐々に明らかになるその姿を見て、驚きの声をあげるヴァイス。

……無理もない。

彼らの瞳に映るのは、体に深い傷を負ったポケモン。 リオルとフ
シギダネとエネコだったのだ。

その3人に、キズナの4人は心配そうに近寄る。

「は、早くどこかで手当てさせなきゃな!」

慌てた様子でホノオが言う。

セナもヴァイスも、表情が引き締まっている、そんな状況で 。

「死んでないよネ?」

危機感が全く感じられない声で、シアンはそう言った。

冷たい3つの視線がシアンに突き刺さったのは、言うまでもない。

「……………辛うじて、息はしているみてえだ。と、とにかく！まずは、ここから近い姉貴の家に運ぶぞ！」

セナが“姉貴”と呼んで慕っているのは、この森に住むカメールの女の子、メルである。

「賛成！」

「おし、急ぐぜ！」

セナの指示にヴァイスとホノオは頷き、傷付いたポケモン達にそつと手を添える。

そして、セナがリオルを、ヴァイスがフシギダネを、ホノオがエネコを、それぞれ背負う　まるで壊れ物を扱うかのように、慎重に……………。

「あれ？シアンの役割がなくなっちゃったヨ？……………じゃあシアンは、道案内でもするネ！」

「要らないからな？」

シアンの提案を、セナは即断る。

(……………テメエが今できる最善の仕事は、この緊迫した状況の中で一刻も早くオレらの前から姿を消すことだ……………)

口に出してはシアンが憤慨しそうなことを、ホノオは心の中で呟いた。

こうして、傷だらけの3人のポケモンを、セナ達は急いでメルの家へと運ぶのであった。

第1話：始まり（後書き）

セナ

「んまあ、今のところはフツーだねえ」

シアン以外は、（今回の話では）一般人だねえ（笑）

ホノオ

「今回の話では」って……。オレはいつでも一般人だ」

セナ&シアン

「どこが？」

ヴァイス

（相変わらずだなあ……）

こんな感じで、次回も頑張ります！

第2話：メルの家にて（前書き）

セナ

「更新早いな」（汗）」

まあ、当分はあちら様とおんなじストーリーですからね。

ホノオ

「当分は”……つて!?”」

むふふふふ（*^艸^*）

しかし……。

色々と、読者様に謝らなければならないことがあるのです……。

セナ

「詳しくは、本文をどうぞっ」

ヴァイス

「なんでそんなに、うれしそうなの……」（汗）?」

第2話：メルの家にて

あの後、怪我をした3人のポケモン　リオルとフシギダネとエネコ　をメルの家へ運んだセナ達は、メルの家で一晩泊まることになった。

はじめのうちは、寝室でメルと共に3人のポケモンの怪我の治療をしていたセナ達だが、ホノオとシアンが喧嘩をしたことにより、憤慨したメルが“キズナ”の4人をリビングへと追いやったのであった……。

「大丈夫かなー？あの3人……。酷い怪我だったよね」

ヴァイスが寝室へと繋がる扉を見ながら、心配そうに呟いた。

「心配だし、オイラ達もそばに居たかつたんだけどなあ……」

セナがホノオとシアンを睨み付ける。

「ごめんなさい……」

体を小さくして、ホノオとシアンは謝った。

「まあ、姉貴ならなんとかしてくれるだろ！意外と家庭的だし」

「“意外と”ってなんだい!？」

セナの言葉を聞いて間もなく、寝室からメルの怒鳴り声がある。

「おお怖ッ……。さ、みんな寝るぞー」

セナはリビングにしかれた布団の中へと潜り込む。

「うん、おやすみー」

「ああ、じゃーな」

ヴァイス、ホノオがそう挨拶すると、彼ら“キズナ”の1日が終わる。

ちなみにシアンは、先程セナに謝った直後、マイペースにも、1人先に寝てしまった……。

次の日の朝、メルの家、寝室にて……。

「うう……」

怪我をしたポケモンのうちの1人、リオルがゆっくりと目を開けた。

「あ、起きたんだね」

包帯の束と傷薬を両手に持ったメルが、ホッとした様子でリオルに声をかけた。

彼の体には、メルが器用に巻いた包帯が……。

「あんまり無理しちゃダメだよ！アンタ達、酷い怪我だったんだから……」

「ココは……」

状況のよく分からぬリオルは、キョトンとした顔でメルを見る。

「ここはアタイの家さ。」

あっと、自己紹介が遅れたね。アタイはメルって言うんだ」

メルがそう名乗ると、リオルはきちんと自分達の紹介をした。

「俺はデルタ。……そこにいるフシギダネがシギで、エネコはエネって言うんだ」

「分かったよ。よろしくね、デルタ！」

メルはデルタと名乗ったりリオルに笑顔でそう言うが、次の瞬間表情が険しくなった。

「しかし……。アンタ達、一体何があつてそんなことに……」

「それは」

デルタというリオルは、これまでのことを話し始めたのだった。

100前、彼らの住む世界を壊滅させようとしたポケモンがい

た。

その名はミュウツー。

その脅威的な存在は、100前に倒されたはずなのだが、実は生きていて……。

それで、デルタ達はミュウツーに戦いを挑んだのだが

「そのミュウツーって奴にやられて、気が付いたらここに飛ばされていたんだね？」

「ああ」

真剣に頷きながら話を聞いていたメル。

彼女が話をまとめると、デルタは深く頷いた。

「あかさ。ココはどこなんだ？その……いろんな意味で」

不安そうにそう尋ねるデルタに、メルは答えた。

「ココは“ガイア”っていう惑星さ。

それで、このアタイの家は、ガイアの中の“聖なる森”ってところにあるんだよ」

ガイア……？

聖なる森……？

聞きなれない地名に、デルタは首をかしげる。

そして、確信した。

「もしかして、違う世界に飛ばされたのか……」

「多分そうだね」

メルも、デルタの話聞いて、薄々感じていた。

彼らは、このガイアの者ではなく、異世界の住人である　と。

「ぐっ……!!」

突如表情を歪めるデルタ。

「しばらくは安静が必要だね。あんまり無理しちゃダメだよ?」

傷がうずくのだろうと思い、メルはデルタにそう声をかけたのだが

「いや、傷というか、その……。何かに締め付けられて痛いんだけど……」

「えっ!??」

デルタの言葉を聞くなり、メルは慌てて彼から包帯を取る。

すると、昨日までひどかった怪我が、嘘のように治っていた。

必死に看病したお陰か、わずか1日での完治であった。

デルタの傷が治ったということは……

「デルタ。他の2人も起こしてくれるかい？」

メルは、おそらく怪我が治ったであろう、フシギダネのシギとエネコのエネを起こしてくれるように、デルタに頼んだ。

「分かった。起きろー!!」

デルタはシギとエネの頭に手刀を振り落とす。

……後に2人に怒鳴られたデルタを、『あーあ』と言いたげな表情で見る、メルなのであった。

「よし、よかった。2人とも傷は治っているみたいだね！」

怒鳴る元気もあるシギとエネを見て、安心した様子でメルは言う。

「そっぴやさ、俺は森の中で僅かな間、意識があつたんだ。メルがここまで俺達を運んだのか？」

もしそうであれば、すごい怪力だな……と思ったりしながらデルタが質問する。

「いいや、アタイの“弟”たちさ。まあ正しくは、“弟みたいなもの”って言えば良いんだけどね」

「その人達に、お礼言わないとね！」

「それ、言えてるわよ」

フシギダネのシギと、エネコのエネがそう言ったとたん、寢室のドア越しに、なにやら騒がしい会話が聞こえてきた。

「よくもシアンに『死ぬ』なんて言ったなあ〜!?!」

「ちょ、オレは知らな　ぎゃあああ!?!」

しばらくの沈黙……。

メル達4人は顔を見合わせる。

すると、今度は別の声が。

「姉貴ー!」

「お姉ちゃん!」

「なんだい?」

その声に、メルは答える。

「救急箱プリーズー!」

「シアンがホノオを襲っちゃって……!」

はあ、とため息をつくメル。

そして、救急箱を持つと、寝室のドアノブに手をかけた。

「ついてきな」

メルのその言葉で、デルタ、シギ、エネの3人は寝室を後にし、セナ達がいるリビングへと向かうのであった。

第2話：メルの家にて（後書き）

はい、謝罪致します。

あちらの“空の探険記”を読んでいらっしやる方は、期待したでしよう。

グリルド・チキンの飛来を……。

しかし、文章を長く書く夕子の私は、あちらの一話をさらに区切らせていただきました。

コラボは大変だ……（汗）

まあ、今回は、こちらで初登場の、デルタ君、シギ君、エネちゃん……。

そして、久々に登場！の、メルの姉貴に注目していただければ……
と思います！

ヴァイス

「グリルド・チキンってだあれ？作者さん」

日本語で、言っではいかんよ（笑）

セナ

「ああ！分かった！」

ホノオ

「マジ!? 誰だよ!?!」

セナ

「“や”で始まって“り”で終わる、4文字の鳥w」

ホノオ

「ああ、焼き鳥ね!?!」

ネイティオ

「おオオオぬウウしいイイー(怒)!!!!!!」

ホノオ

「ちよっ………なんかパワーアップして「ぎゃああーッ!!!!!!」

セナ

(ホノオざまあww)

………今回は、焼きt

ネイティオ

「ギロツ(怒)!!」

………ネイティオ様が本文中へと飛来なさるかと思しますので………(汗)

セナ

(作者も恐れるこの剣幕………(汗)(

では、後書き長すぎて申し訳ないですm()m

この辺で失礼致します！

第3話：飛来（前書き）

えーと……。

こちらの更新が遅れてしまい、申し訳ございません（汗）

セナ

「活動報告の欄にも書いたらしいんだけどさー。

このバカ作者、今週の水曜（因みに今日は11月15日の、日曜日）……もしくは木曜までは忙しいみてえ」

あちら様ではかなりストーリーが進んでいるのに、私がスローで申し訳ないです（´；；´）

ホノオ

「まあお前ってさあ」

ん？何だいホノオ？

ホノオ

「今年の夏休みに突発的にこのサイトで小説書き始めたのはいいけど、宿題に追われ（自業自得だけどなww）、科の行事に追われ……だったもんな（笑）」

ホノオ……。

よく分かってるじゃないかっ！（*ノーく*）。

まあ、そんな私の高校の科の行事も、今度の水曜で（多分）終わりなのです

本当は、執筆に没頭したり、他の作者様ともっと交流を深めたり…
…というのを、もっと早くやりたかったのですがね
f (^_^ ;)

ヴァイス

「まあ、水曜が終わったら、初心にかえって頑張ればいいじゃない

」

そうさせていただくつもりでございます(笑)

シアン

「まっ、今度は“受験勉強”という壁が立ちほだかるんだけどネッ

」

……(=||=;)

なんだか私事ばかり書いてごめんなさいね(汗)

今回のお話は、タイトルに書いているとおりなのですww

第3話：飛来

メルが目を回すホノオに消毒液をぶちまけると、たちまちホノオは起き上がった。

「いってえええーッ!!」

シアンに何度もつつかれて怪我をした体に、大量の消毒液。

あまりにしみたようで、ホノオは大騒ぎをする。

「それだけ元気なら、大丈夫だね」

ホノオとシアンの騒がしさに嫌気がさしたメルは、適当にホノオの治療を終え、救急箱を片付けた。

(まさか、俺達の治療も、こんなに乱暴に……)

メルの後ろについてきて、寝室からリビングに入ってきたデルタ達がメルを見るその瞳には、呆れの色が宿っている。

「あ。アンタ達の治療はちゃんとやったから、安心しなよ!」

……確かに、こんな乱暴な治療で、あれだけの怪我を1日で治すことは不可能だが……。

(そんなら、オレの治療だってまともじゃってくれよな……)

ホノオは、普段はセナが肩からかけている青色のバッグ　　今はリ

ビングの床に置かれている から体力を回復する“オレンの実”をこっそり取ると、それを食べて傷を癒した。

そんな騒動が終わると、セナはメルの後ろにいる3人のポケモンの存在に気が付いた。

「おっ！お前達は昨日のポケモンだな？」

名乗るのを忘れそう話しかけるセナの言葉に、3人はただコクリと頷く。

「ここにいる4人が、アンタ達を助けたポケモンだよ！

……ほら、セナ。まずは自己紹介しないと……」

メルがそう言うと、セナはハツとした表情になり、苦笑いを浮かべて3人のポケモンに自己紹介した。

「アハハ、忘れてた……。

えーと、オイラはセナ。

この4人でやってる救助隊、“キズナ”のリーダーやってるんだ。よろしくな！」

それに続いて、ヴァイス、ホノオ、シアンの順で、自己紹介をする。

「ボクはヴァイス。

この救助隊は、おかしな子ばかりで大変なんだよ」

「何だと!？」

……あ、オレはホノオってんだ！よろしく!」

「シアンだよ よろしくネ！」

こちらが賑やかに自己紹介を済ませると、あちらも自己紹介を

「助けてくれてありがとう。俺はデルタ」

3人のポケモンのうちの1人目 リオルは、デルタと名乗った。

「いってことよ！」

よろしく、デルタ！」

セナが笑みを浮かべてデルタに挨拶を返すと、ヴァイス、ホノオ、シアンも、なんとも揃わぬ声で、各々が、よろしくと言う。

「僕はシギ」

「私はエネ、よろしくね」

デルタと一緒にいたポケモン フシギダネはシギ、エネコはエネも、名前を名乗った。

そして、エネは可愛く微笑みかけ、シアンに握手を求めべく、前足を差し出す。

「女の子同士ね よろしく、シアン！」

シアンの表情が突如曇り、エネを睨み始めた。

「……………え？」

エネがシアンの行動の意味が分からずに少し焦っていると、ホノオが説明を始めた。

「女に見えるよなあ、そりゃあ。……ところがシアンは男の子なんだぜ？

だから、女の子扱いされると機嫌を損ねるってワケ」

「ああ、なるほど……」

エネだけでなく、デルタとシギも、まじまじとシアンを見た。

「失礼な紹介しないでヨ！！」

シアンはホノオの紹介の仕方が気に入らなかつたようで、ホノオに“ドリルくちばし”を繰り出す。

「へーん 二度も食らうかってーの！！」

ホノオは今度はそれをヒラリとかわすと、深く息を吸いはじめた。

「黒こげにしてやるぜ！食らえ！“火炎ほ」

ホノオがシアンに攻撃しようとしたその時、セナがホノオを睨み付け、攻撃を制した。

「ここは姉貴の家だからな？」

セナの口調も目付きも、問題児のホノオを黙らせるのに十分な恐ろしさを持っていた。

「はい……」

ホノオが肩をすくめて謝ると、シアンがざまあみると言いたげに、ニヤリと笑いながらホノオを見るのであった。

こうして騒動が終わり、メルはセナ達にデルタ達のことを説明した。

彼ら3人もまた、ガイアではなく、別の世界の住人らしいということとを。

そう、彼ら3人“も”。

「へえー……」。

お前達も、別の世界の住人なんだな」

腕を組ながら言うセナの言葉に、デルタが反応した。

「え……。お前達“も”って」

セナをまっすぐに見つめて問うデルタを見て、答えたのはホノオだった。

「オレとセナは、実は元は人間で……」。

だから、このガイアの住人じゃなくて地球の住人だったってワケ」

「えっ……!?!」

ホノオが発したある言葉に、デルタは強く反応する。

だつて。

「どうしたの？デルタ」

ヴァイスが不思議そうにデルタを見つめてそう言つと、デルタはセナとホノオにとって衝撃の一言を。

「俺も、元は人間だつたんだ」

「……へ？」

デルタのその一言に、セナとホノオは驚きの声を重ねた。

「じ、じゃあ、お前も地球から……？」

ホノオの間に、デルタは首を傾げて答えた。

「さあ。俺は人間の時の記憶がないから……」

「あ、じゃあオイラと同じだ」

セナは少しばかりデルタに親近感を持ったようだ。

「逆に、ホノオは記憶があるのか？」

デルタがホノオに問う。

普通は“記憶喪失”などという事態は異常なものだが、この時はなぜかホノオが浮いているように見えた。

「ああ。オレは……まあ、記憶があるからこそ役目があるっていうか……」

記憶をなくしたセナのサポート……。

ホノオがガイアにきた理由は、それだったのだ。

「ま、こんなバカ猿の記憶なんか、たいして役に立ってないけどな」
セナが冗談混じりにホノオにそう言うと、ホノオはムキになってセナに殴りかかる。

「何だとー！？せつかくオレ様はるる来てやったのにー!!」

「あたた！いつ……痛い痛い!!」

デルタがクスリと笑うと、その場にいた一同 エネにシギ……。それから、いつもながらの光景を目にして苦笑いのヴァイス、シアン、メル の間にほのぼのとした空気が流れる。

こうして徐々に、皆が打ち解けるのだった。

「……あ、そっだ!」

騒動が一段落し、雑談をしていた時、セナは突如何かを閃いたよう

に声を上げ、立ち上がる。

「“精霊の崖”にいるネイティオなら、デルタ達が元の世界に戻る方法を知っているかもな！」

その考えに目を輝かせる、“キズナ”一同に、メル。

事情を知らぬデルタ達は、首を傾げている。

「名案だよ！」

「さっすがセナだね！！」

ヴァイスとシアンがセナをおだてると……

「まっ、バカとは違いますから」

セナはホノオを横目で見ながら、少し嫌みな口調で言ってみた。

「……ならオレにも考えがある……。

来い、バカセナ！！」

ホノオはセナの背中を押し、スタスタとリビングを通り抜けると、玄関のドアを開けてメルの家の外にでた。

「あっ……ちょっと……！」

な、何するんだよ！？」

背中をぐぐつと押されてバランスを崩しそうになるセナは慌ててホノオに抗議をした。

リビングの中にいた他の面々も、セナとホノオに続いてメルの家の外へ……。

「オレが今からネイティオを召喚する……。
てめーは盾になれ!!」

ホノオはセナの後ろに立つと、彼の肩をグツと掴み、身動きをとれなくした。

「はっ!? え……ち、ちよつと!!」

ホノオの言う“召喚”の意味が分からず、セナは戸惑う。

その言葉の意味が分かるのは、長い間ホノオと共に旅をした、シアンのみ……。

(はぁ……。 “アレ”をやるんだネ……)

シアンは呆れてため息をつく、うるさくなりそうだ、と、耳をふさいだ。

そして、ホノオは“あの言葉”を叫ぶ。

ネイティオを召喚する、“魔法の呪文”を　。

「オレはぁぁっ!

焼き鳥が大好きだぁぁっ!!!!」

「ふぁっ!?!」

ホノオはメルの家から遠く離れた“精霊の崖”に向かって思い切り叫ぶ。

当然ながら、近距離で大声を出され、さらに、耳をふさぐ術のないセナには、ホノオの叫び声が大きなダメージになったようだ。

『大好きだあーっ!!』

大好きだー!

……すきだー……!』

神秘的な雰囲気、ここ、“聖なる森”に、ホノオの声がこだまするが、いつまでたってもネイティオが来ない……。

それもそのはず。

ホノオとシアンが2日かけて歩いてきた道のりを、一つの大声が突き抜けるなんて……。

普通ではない。

「“召喚術”、失敗だネ」

ニヤニヤしながら、シアンはホノオを冷やかす。

「……ふう。オレ様の魔力でも召喚できないなんてな」

『魔法使いじゃないんだから』……と、誰もがつつこみを入れなくなる、ホノオのセリフだった。

(そうか。

ネイティオは“焼き鳥”って言葉を聞くと怒るから……。

だからホノオはネイテイオを呼ぶためにあんな行動を……)

ヴァイスは、たった今、ホノオの奇行の理由がピンと来たみたいだった。

セナはホノオのハイパーボイスもどきですっかり目を回し、ふらふらしながら立っている。

なんとなくその場が異様な雰囲気にもまれたとき、ホノオに声をかけたのはデルタだった。

「ホノオ、何て言えばいいんだ？」

「えっ！？ “焼き鳥” だけど……。

まさかお前……？」

ホノオがそう言いかけた途端、デルタは信じられない行動に……。

「 “焼き鳥” って何だよおおーッ！！！！！！」

「うわあーっ！！！！」

驚異的なデルタの大声が、空気を裂くように森中に響き渡る。

デルタの近くにいたエネヤシギはもちろん、その場の皆があまりの大声に驚き、耳をふさいだ。

セナがこの追い討ちで苦しんだのは、言うまでもない。

そして、思い切り叫んで少しスッキリとした表情のデルタの前に、

奴は現れた。

「“焼き鳥”だとおおーっ!?!?
させん!! “サイコキネシス”!!!”

奴 怒り狂い目が血走っているネイティオは、声の主デルタに容赦なく“サイコキネシス”を放つ。

「ええええーっ!?!?”

当のデルタはもちろんのこと、エネとシギも驚き唾然としている。

ちなみに、生でネイティオの“サイコキネシス”を見るのが初めて、セナとヴァイス、そしてメルも。

そして、当然のごとく状況が飲み込めないエネとシギに、ホノオは説明した。

「あのネイティオは、“焼き鳥”って言葉が嫌いだよ。
聞くとあんな風に凶暴化して」
「お主イイイ!!!!!”

ホノオの言葉を遮るネイティオ。

その理由はもちろん。

「ちよ!! 待て待て!!!
今のはちが……つぎゃあああーっ!?!!”

ネイティオの強力な“サイコキネシス”が、“焼き鳥”という言葉

をすっかり口にしてしまったホノオに襲いかかる。

その光景を見て、さらに啞然とする、エネ、シギ。
オマケにヴァイスとメル。

シアンとセナは、ざまあみると言いながらホノオをあざ笑い……。

飛来してきたネイティオは、ホノオがドサリと倒れたとたん、我に返るのであった。

本日の犠牲者、二名。

第3話：飛来（後書き）

セナ

「犠牲者…… W W」

シアン

「ホノオはともかく、デルタはかわいいそうだね（汗）」

そうだねー。

ホノオ

「“ホノオはともかく”て……（怒）」

キミはもう慣れたでしょ

（・・）？

ホノオ

「ひどいやひどいや……。そりゃないさ……（泣）」

ヴァイス

「てゆーかさ、最近の作者さんのギャグシーン、なんかワンパターンじゃない？」

た、確かに……

（＋＋＋）

ぶっっちゃけ焼き鳥とか、皆様いい加減飽きましたよね（汗）

うーん……。

そろそろ焼き鳥に頼らずに、何かほかにおもしろいことは……。

うーん……。

セナ

「とりあえず、勉強しなさい（怒）」

は、はい（汗）

それでは、わたくしは今度の水曜日　もしくは木曜あたりまでのサイトに顔を出せないかもしれません（泣）

しかし、それが終わったら、また気持ちを入れ替えて頑張らせていただきます！！

シアン

「じゃあネー、みんな」

なぜアンタがしめる（怒）？

第4話：所詮ホノオの戦略（前書き）

こちらの更新がお久しぶりになってしまい、申し訳ないです（汗）

ホノオ

「……何このサブタイトル（怒）」

しばらく更新できなかった間に、あちら様ではかなりストーリーが進んでいて……（汗）

これからしばらくは、こちらの更新に力を入れます！！

ホノオ

「オイ作者！このサブタイトル」

そして、いよいよ今回からバトルシーンなのですが、ひとつ断っておくことがございまして……

セナ

「作者はホノオを完・全・無・視！したww」

ホノオ

「……どーせ。どーせオレなんか……（泣）」

まあ当たり前かもしれませんが、戦闘の流やそのた細々とした点に、多少あちら様の『空の探険記』との相違点がございます。

ヴァイス

「まあ確かに、文章や展開丸写しじゃ、プラネットさんにだけ負担かかるしねー（汗）」

……はい。それは申し訳なくて……（汗）

ですから、多少の相違点を見つけてしまっても、決して矛盾させる訳ではないということをお伝えしたくて……。

ホノオ

「話長いぞー（怒）。クソ作s」

シアン

「それでは、どござん」

ヴァイス

（ホノオ、さすがに可愛いそう（汗））

第4話：所詮ホノオの戦略

「臨海の丘」！？そ、それは本当かい、ネイティオ！」

メルの驚いた声が、“聖なる森”に響き渡る。

今から数分前。

暴走したネイティオにより、ホノオとデルタは“サイコキネシス”で攻撃され、ひどい目にあった。

メルが、直ちに“オレンの実”で2人の傷を癒すと、すっかり正気になり、申し訳無さそうにホノオとデルタを見ているネイティオがいたのだった……。

その後ネイティオと和解すると、いよいよ一同は、ネイティオを呼び出した理由に触れたのだった。

デルタとシギとエネが、元の世界へと戻る方法について。

……その問いについてのネイティオの答えに、現在メルは驚いているのだ。

そのネイティオの答えとは 『デルタ達3人を待つ者が、“臨海

の丘”に現れる』と言つこと。

異世界の住人であったデルタ達3人、そして、セナにホノオ……。さらにはこの惑星“ガイア”の住人であるヴァイスとシアンまでも、その地名 “臨海の丘”、に首を傾げている。

そんな中、意味ありげな反応をするメルに、皆の視線が集まる。

「……否定したいが、事実だ」

冒頭でのメルの問に、静かに答えるネイティオ。

「なんてこつたい……」

メルが額に手を当ててため息をつくその理由は、すぐにネイティオが話した。

“臨海の丘”というのは、現在地である“聖なる森”から南に行つたところにある、美しい風景が広がる地。かつては花が咲き乱れ、柔らかな風が常に楽しげに吹いていたのだが……

今は、違う。

ここ最近ガイアで起こっている自然災害の影響を受け、前々からそこに住んでいたポケモン達の多くは家を捨て、残ったポケモン達は、

どういう訳が、心が歪んだ者ばかりだという、なんとも物騒な土地になってしまった。そんな、危険な場所だからだ。

「うわ……。それってかなりヤバそうじゃん……」

セナが顔をしかめると、“キズナ”の4人の間には、少し暗い空気が漂う。

しかし……

「別にかまわないさ。まずは元の世界に戻るのが第一」

このデルタの言葉に、目を丸くするセナ達。メルも例外ではない。

「そうだね。修羅場は結構潜ってるし……」

「多少地理を教えてくれたら、自力でも行けるわ」

デルタの後に、シギとエネも堂々と続く。

その瞳は、確実に戻れるという、たくましい自信に満ちていた。

(なるほど……ね)

セナはデルタ達3人を見て、何かを感じ取ったようだ。

危険な冒険を乗り越えてきた者独特の、心の強さのような何かを。

「うむ。私も、お主達3人なら、なんとかなると思っておる。その頼もしい瞳に期待しよう」

ネイティオはそう言うと、翼をいっぱい広げる。

そして……

「では、私はこれにて失礼する……。お主達、頑張るのだ！」

そう言うと、ネイティオは翼をはためかせ、“テレポート”を使って自らの住む“精霊の崖”へと帰って行った。

そして、ネイティオが去った直後、一同は、ネイティオが翼を広げる必要性について議論したのだった。

……当然、“テレポート”で移動した彼にとって、翼をはためかせることには何の意味もないという結論が下ったのだった。

「……そうだねえ。なら少し互いの腕を見合わせないか？」

「それって、オレ達とデルタ達がバトルするってコトなのか!？」

メルという言葉に、嬉しそうに目を輝かせて反応するホノオ。

メルは彼に頷くと、続けた。

「やっぱり、“臨海の丘”に行くには、ある程度の実力と覚悟がな
くっちゃ。」

アンタ達3人の覚悟は認めたが、ちょっと実力も見たいんでね。
セナ達“キズナ”の4人も、それなりに修羅場を経験してるから、
弱くはないはずだよ！」

メルが言う“修羅場”という言葉に、ふと、思いを馳せるセナ。

彼は一度、伝説のポケモンであるスイクンと戦い、瀕死の重傷を負
った。

また、とある盗賊団の頭と戦い、ボロボロになったことも。

と、なんだか思い出すと痛くなるようなことばかりだったので、
すぐにその考えを打ち消すのだった。

「よし、いいぜ。じゃ、組み合わせはどうする？」

メルの提案に賛成するデルタ。

そして、バトルの組み合わせを決めることに。

「ま、とりあえず、シアン対エネは確定だな！」

「……………どうして？」

ホノオの言葉に、シアンは首を傾げた。

「決まってるだろーが！女の子同士で戦った方がいいっしょ」

その言葉を聞いて、セナとヴァイス、それからメルは、必死に笑いをこらえている。

一方のデルタ、シギ、エネは、ホノオの意見にうんうんと頷くシアンが本当は男の子であることを忘れて。

「シアンは男の子だヨ！！何度言ったら分かるノ、バカホノオ！！」
怒ったシアンはホノオに“バブル光線”を繰り出した。

陽の光を浴びて煌めくたくさんの泡がホノオに迫るが

「そーんな攻撃、打ち消しちゃう！“火炎放射”！」

ホノオが吹く強い炎が、シアンの泡を打ち消し………てつきり、シアン対ホノオのバトルが始まるかと思いきや

「アタイの“冷凍パンチ”でぶん殴りたいのかい？」

メルが右手に冷たい氷をまとわせながら、低い声でそう言うと、たちまちホノオとシアンは大人しくなる。

ホノオもシアンも、氷タイプの技には強い種族なのだが、そんな彼らも臆する迫力

すっかり傍観者と化したセナとヴァイスはメルの権力に改めて感心し、デルタとシギとエネは、そういえばシアンは男の子だったのだと、思い出したのだった。

その騒動の後は、メルの進行により、手早く組み合わせが決まっ
てゆく。

どこか性格のにているところがある、ヴァイスとシギがバトルをす
る事になり、なんとデルタは、セナとホノオを一度に相手すること
に。

はじめはメルも、セナとホノオ、どちらがデルタと戦うべきか、
選択できずにいた。

当のデルタも、選択する基準もわからずに困惑していたのだが……。
それを変えたのは、エネのこの一言。

「いつそのこと、2対1でも構わないわよ。ね、デルタ」

ウインクをしながらそう言う彼女の突然の発言に、デルタは驚くが

「ま、まあ別に構わないけどよ……」

「大丈夫なのかい？」

メルはデルタの返答に驚く。

「ああ」

そのデルタの返事で、バトルの組み合わせが決定する。

……セナは1人、どこか腑に落ちぬ表情を浮かべる。

（2対1でいい……か。

なんか、ナメられたもんだな……（

悔しさの中に、どこかバトルにやる気を感じぬ感情を抱く、セナなのだった……。

「そんじゃ、始めるよー！」

審判はメルが務め、シアンとエネのバトルが始まった。

「お手柔らかにね」

エネの言葉に、

「シアンは手加減しないヨーー！！」

ご機嫌に答えるシアン。

危機感がまるで感じられない。

「シャドーボール」！！

シアンの言葉を見捨てるかのように、先制攻撃をするエネ。

黒い光を放つ球体が、高速でシアンへと迫る。

「えい、渦潮」！！

シアンが水をまわって鋭く回転し、自らが渦と化する。

エネの放った“シャドーボール”の黒い光は、“渦潮”に巻き込まれた途端に拡散し、消滅してしまった。

「やるわね……」

エネが小さな声でそう呟く。

すると、シアンが一瞬思索した後、とある作戦を執行する。

このバトルが始まる前、ホノオはシアンに耳打ちして、足りない脳みそで珍しく思いついた戦略をシアンに伝授したのだった。

……シアンのプライドが酷く傷つくので、初めは彼は断固否定したのだが、ホノオが、『もしお前がこの作戦を実践したら、“はるかぜ広場”で“青いグミ”を買ってやるぜ！』……と、モノで釣ったのだった。

(……ホノオのいいなりになるのはムカつくけど、バトルに勝って、シアンのだーいすきな“青いグミ”がもらえるのなら……！)

覚悟を決めて、シアンはエネをつぶらな瞳で見つめた。

「ねえ、エネ、シアンにもーっと優しくしてヨ」

「えっ……！？」

その甘く可愛らしい声は、まさに女の子。

シアンがエネに甘えると、激しく惑わされるエネであった。

「うわ。キツイよ、あれは！」

ヴァイスがエネに同情してそう言う。

以前ヴァイスも、シアンのこの誘惑の餌食になりかけたのだ。

(さあ、“とどめ”だ、シアン！)

ホノオがにやけながら、戦局を眺める。

「何にやけてんだ、クソザルが……」

先ほどからずっと仏頂面のセナが、ホノオを睨む。

「まあ、見てりゃ分かるって」

まさにホノオのその言葉通り、シアンは“ある言葉”を。

「お……。女の子には、優しくしないとネ、エネ」

少々引きつったが、シアンは可愛らしくそう言った。

「ぶっ……！！ハハハハハ！言った！言いやがった！！
自分のこと……女って……ハハハハ！！」

シアンを指差し、おかしそくに笑い転げるホノオ。

そう。彼が考えた作戦とは、エネ達がシアンを女だと思っていたことを利用し、シアンが自らを女と名乗ることでエネにそう思い

こませることであつた。

確かに、出会つたばかりではまだ記憶の整理が出来ていないし、大抵の女の子は、女の子には優しくするものなのだ。

そう考えると、ホノオが考えたこの作戦は、なかなか賢いもののように思われるが

涙がでるほど大笑いしているホノオを見ると、ただシアンに、自らが女であるかのような発言をさせて楽しんでいるだけのように見え
た。

……そんな彼を、シアンは怒りで顔を紅くして睨みつける。

そして、あまりにもホノオが激しく笑っているので、エネの注意はシアンではなく、そちらに向いてしまった……。

「……………ありがとうね、ホノオ！」

ふと、黒い笑みを浮かべて、エネが呟く。

「アハハハ……………っえ？」

ホノオは笑いをぐつとこらえて、不思議そうにエネを見た。

「だって、あなたがそんなに笑っているのは、シアンが男の子なのに、自分は女の子だって言ったからでしょ？」

「あっ……………!!」

ズバリ、正解を言い当てるエネ。

その推理力に、セナにヴァイス、さらにメルまでも感心する。

「そういうことで……。私は女の子で、あなたは男の子。女の子には優しく……。よね、シアン？」

「うっ……!!」

シアンにはエネがなんとも恐ろしく見え、足がすくむ。

そして

「女の子には優しくしましょ!!」

エネが獲物に向けて思いきり振り下ろした尻尾を、シアンが避けられるはずもなく　シアンの悲鳴が辺りに響くのだった。

「ホノオの……バカ……」

恨みのこもった声でこう呟くと、シアンはドサリと倒れる。

「え、エネの勝ちだね……」

女性特有の黒さを醸し出している今のエネには、さすがにメルも苦笑い。

そして、セナはメルの家のリビングまで急いで自らの青色のバッグ

を取りに向かい、その中に入っていた“オレンの実”をシアンに与えたのだった。

こうしてシアン対エネのバトルがエネの勝利に終わると、次のバトルへと移る。

「さあ、いくよ！」

「負けないからね、シギ！」

シギとヴァイスが口々に言っていると、対峙する。

どこか温厚な、似たもの同士の戦いだ。

「セオリー通りなら、ヴァイス君が有利ね」

確かに、そのエネの言葉の通り、相性だけを考えて、炎タイプのヒトカゲであるヴァイスは、草タイプのフシギダネであるシギよりも有利である。

「シギは“あの力”を使わなくてもヴァイスに勝てるか？」

意味ありげな質問をエネにぶつけるデルタに、『なんとも言えない』とだけ答えるエネ。

「じゃ、始め！！」

メルが片手を高々と上げて試合開始のコールをすると、ヴァイスとシギのバトルが幕を開けるのだった。

第4話：所詮ホノオの戦略（後書き）

シアン

「サブタイトル通り、『所詮ホノオの戦略』だね（怒）」

だって、ホノオですからww

セナ

「エネ、賢いなー（汗）」

うーん。

エネちゃんは頭脳派なイメージがあったからこんな展開にしてみました。が、どうだったかな……？

シアン

「とりあえず、シアンはホノオに一発攻撃しとかないと、気が済まないヨ（怒）」

あー。

別に一発じゃなくてもいいのよ、シアン。
百でも千でも

ヴァイス

「いくらなんでもホノオがかわいそう……（汗）」

ホノオ

（ヴァイスの優しさが身にしみる……（泣））

第5話：ボクの成長、揺れる2人……（前書き）

早めの更新、頑張りました！！

セナ

「頑張つてこのスピードのお前つて、なんなんだかな」

……何へそ曲げてるんだよ（汗）

第5話：ボクの成長、揺れる2人……

「えいつ！ “火の粉” ！！」

「いくよ！ “エナジーボール” ！！」

燃え盛る火の玉と、光り輝く緑色の玉が勢いよくぶつかり合い、弾けるように双方が消滅する。

しばし辺りに煙がまうが、それが晴れるとヴァイスは行動にでた。

「よし、 “煙幕” ！！」

小さな黒い球体がシギにぶつかり、それが弾けて黒煙が生じ、シギにまとわりつく。

よし、視界はふさいだ。

ヴァイスはニヤリと笑うと、シギに炎を放つために大きく息を吸うが

「そんなのは通じないよ！ “エナジーボール” ！！」

緑色の光が黒煙を引き裂き、シギの視界が晴れる。

どうやら、地面に向かって “エナジーボール” を放ち、その衝撃によって生じる突風で、 “煙幕” を振り払ったようだ。

「あらら……」

いとも簡単に突破口を見つけられて、苦笑いを浮かべるヴァイスだったが、すぐに次の攻撃にでた。

「 竜の怒り ” ! ! ! 」

ヴァイスが地面に手をつくると、地面から竜のような形をしたエネルギーが飛び出し、シギに噛みつきこうとするかのように迫る。

「 ならこっちだって……。 “ ソーラービーム ” ! ! ! 」

シギは、その背中をつぼみから強烈な光の光線を放ち そのパワーは、ヴァイスの “ 竜の怒り ” をはるかに上回るようだった。

「 わっ ! ! ! 」

自らの攻撃が消されたことを確認すると、ヴァイスは少しでも向かってくる “ ソーラービーム ” をかわそうとして、地面に伏せる。

そこで激しい爆発が起こり、バトルを見ている面々はヴァイスの姿が確認できなくなる。

「 …… ヴァイス、大丈夫カナ? 」

オレンの実を食べて体力を回復したシアンが不安げに言うと、セナが無表情で答える。

「 当たり前だろ。アイツだぜ 」

その言葉を言い終えた頃、徐々に煙が晴れはじめ、ゆっくりと立ち上がるヴァイスの姿が 。

「ちょっと、辛かったな……。でも、ボクも本気を出すよ！」

ヴァイスがそう言うと、彼の右手が赤く燃え盛る炎を宿す。

（見ててね、お姉ちゃん！）

ヴァイスが使おうとしている技は、いつかメルから教わった、あの技。

自らの進歩を、審判として戦局を見つめるメルにみてもらいたかったのだ。

「炎のパンチ」！！

彼のやる気からか、尻尾の炎もいつもより強く燃えている。

そして、先ほどの爆発による煙がまだうっすらと漂っているせいで、シギはヴァイスの熱い拳を避けられなかった。

「ぐっ……！」

彼にはこの一撃は不意打ちのようなものであり、バランスを崩して後退すると、フラフラと立ち上がる。

（ヴァイスも成長したね……。前はブレロ達にいじめられていたくらいなのに……）

メルは今の炎のパンチを見て、嬉しそうに微笑んでいる。

ハスブレロのブレロに、ブルーのブルル……。セナ達がこの2人にやられていたところを救ったのが、セナ、ヴァイスとメルの出会いだっただけだ。

「すごいなあ、ヴァイス。

……でも、僕だって“本気”を出すからね!!」

そのシギの言葉で、フツと我に返るメル。

デルタとエネは、シギの“本気”という言葉に、なにか心当たりがあるようで、互いに視線を合わせている。

次の瞬間、シギの体が緑色に輝き始めた。

対峙するヴァイスはもちろんのこと、セナ、ホノオ、シアン、メルも、この状況に驚いている。

「もしかして、進化ってやつか？」

ホノオがセナにそう聞くが、

「オイラに分かるわけねえだろ。黙って見てろ」

相変わらず不機嫌なセナは、無愛想にホノオに言い放つ。

その様子が気にくわなかったのか、ホノオは舌打ちをすると再びバトルを眺めるのだった……。

「これで決めるよ!“エナジーボール”!!!」

“ エナジーボール ” ！？

その技名に、ホノオやシアンは驚く。

シギが放った緑の球体は、彼やヴァイスの体の大きさを優に越え…
…先ほどシギが放った“ソーラービーム”などとは比べものにならぬスピードで、ヴァイスに迫っていたからだ。

しかし、その凄まじい攻撃にも、ヴァイスは臆さなかった。

まだ熱を持っていた右手を再び握りしめると、“エナジーボール”
に立ち向かう。

「 炎のパンチ ” ！！ 」

ヴァイスの小さな拳と、シギの巨大なエネルギー弾が衝突し、辺り
には激しい爆風が吹く

爆発が終わると、傷つき倒れたヴァイスの姿が露わになった。

「 勝負…… ありだね 」

圧倒されつつも、メルがそう呟く。

突如シギが使った強大な力に驚いたのはもちろんのことだが、それ
より

こんなにボロボロになることは分かっていたはずなのに、それに立ち向かうヴァイスの姿に驚いたのだ。

「ヴァイス!!」

この時ばかりはセナの目にも生気が宿り、“オレンの実”を片手にヴァイスに駆け寄った。

ホノオ、シアン、メルも集まり、ヴァイスの回復をし、彼をたたえている中

「シギ!! どうして“ウッドパワー”なんて使ったのよ!!?」

エネの怒鳴り声が、辺りに響き渡る。

「どうやら“ウッドパワー”とは、先ほどシギが使った特殊能力のことのようだ。」

シギがこの力によって緑の光をまとうと、戦闘能力が跳ね上がるらしい。

「だって、つい」

「だってじゃない!!!!」

小さくなって言い訳をするシギに、デルタとエネの怒鳴り声が重なって襲いかかる。

一番酷い目にあっただのは、ボクじゃなくてシギなのかもなあ…

…。

お説教の様子を見ていたヴァイスは、思わずシギに同情してしまうのだった。

そしていよいよ、デルタ対セナ&ホノオのバトルが始まることになっていた。

顔を合わせているのは、いずれも元人間……。

デルタが、よろしく、といたげに微笑みかけてくれたので、ホノオは親指を立ててニコリと笑い、それに答えたのだが

セナは視線を反らすと、地面をじっと見つめる。

刹那、セナの右腕に鋭い痛みが走った。

「っつて!」

セナが右側に立つホノオを睨みつけると、ホノオの険悪な眼差しがセナに注がれた。

「何するんだよ、バカ!」

セナが、自らの右腕をつねったホノオの左手を思いきり叩く。

「っ！バカとはなんだ！！てめえこそ、いつまでひねくれてんだよ！！」

セナより少し背が高いホノオは、幾分か威圧的にセナに言い放つ。

「喧嘩なんかするんじゃないよ！！」

そこでメルスの怒鳴り声が飛ぶと、2人は舌打ちをして、互いの視線をそらした。

「…………大丈夫か？」

デルタが不安げにそう聞いてくる。

「あ、ああ！大丈夫、大丈夫…………。全力で行こうぜ、デルタ！！」

ホノオはその間に、再度笑顔を見せて答えが、すっかりへそを曲げているセナには、デルタの心遣いが届かなかった。

なんなんだよ。ホノオは…………。

もしデルタが、さっきのような力を持っていたら、それこそ2人がかりでも勝てねえし…………。

まともに張り合うだけ、負けたとき情けないじゃん…………。

はじめはちょっとした胸のつかえだったのだが、それらの負の感情が、セナの中で渦を巻き、制御も効かなくなり…………。

その怒りの矛先が徐々にホノオへと向き始め、セナとホノオの関係が揺れ始めた。

そんな不安定な状況で、メルの試合開始のコールが響いたのだ。
った。

第5話：ボクの成長、揺れる2人……（後書き）

シギ君の“ウッドパワー”は、あんな感じの描写でいいのかな……？

詳しくは“空の探険記”をどうぞ（逃げるなw）

そしてそして、次回のセナ達のバトルは、私なりの展開を考えてます。

まあ、結果はあちら様とは変わりませぬ

セナ

「ネタバレ厳禁（怒）」

………そういえば、セナとホノオの立場が逆では………？と思われる方もいらっしやるかもですね。

いつもはわりと、セナは良い子、ホノオは悪い子ですからw

今回のセナは、彼の短所を描いてみたくてあぁなりました。

自分の気持ちをコントロールできないし、頑固でプライド高いし……。

本編で戦いに向けられる意地や根性は、こんな形でマイナスにできたりします。

ホノオが大人に感じるかもしれませんが、それは、彼がただ純粹にバトルを楽しみたい単純さから来てますw

ホノオ

「あー、ムカつく。セナの奴……（怒）」

すっかりバラバラな2人はどうなるか？

それはまた、次回で

第6話：バトルって？（前書き）

……自分でもビックリです、こんなに早く更新できること……（笑）

セナ

「この完全夜型生活は何だ？」

この前の朝なんか、11時半まで寝てたぐうたらじゃねえか」

あー聞こえない〜

何も分らない（略）

ヴァイス

「危うく歌詞の引用になるところだったね（汗）」

ホノオ

「こんなネタ知ってる奴いるのか？」

ど、読者様に向かって“奴”とは、お前（怒）

……なんか、夜中になるとテンションがおかしい私ですw

ではでは、どござ

第6話：バトルって？

「バレットパンチ」！」

メルの試合開始の言葉と共に、デルタは小手調べの一撃をホノオに放つ。

セナを狙わなかったのは、彼の気遣いからだろう。

拳が衝撃波となってホノオに迫るが、ホノオは思いきり息を吸い込み、自慢の攻撃をぶつけた。

「いくぜ！！」「火炎放射」！！」

灼熱の炎は、迫る衝撃波を一瞬で飲み込み粉碎し、さらにデルタに迫る。

「うおっ！？」「電光石火」！」

それを見たデルタは、素早い動きで間髪ホノオの攻撃をよけた。

「すげえな、あれがかわされたか……」

今の一撃には自信があったホノオは、デルタにかわされたことに驚く。

確かに今の一撃は、元々パワー派のホノオの普段の“火炎放射”よりも威力があったように思える。

そして、その理由は、本人もよく知っていた。

ホノオは、少し離れたところでバトルを傍観しているセナを横目で鋭く睨む。

(アイツ……)

いかにもやる気のなさそうなセナを見ると、怒りが込み上げるホノオ。

その怒りを先ほどの“火炎放射”にぶつけたせいで、いつもより威力が増していたようだ。

「おいセナ。お前も少しは戦えや」

ホノオが低い声でそう言う。

そこでセナを無視しなかっただけ、彼なりに気を遣ってはみたのだろう。

“電光石火”で猛スピードで動いたデルタも、体勢を整えると、セナとホノオを眺めた。

話しかけられたセナの返答は、ホノオを激怒させることになった……。

「いいよ。お前すごいじゃん。オイラなんかいなかったって、勝てるんじゃない?」

「てめえ……!!」

ホノオの左足からは、激しい炎が燃え盛る。

そして

「いい加減にしろ……!!」

ホノオがセナに向かってゆくその姿は、弾丸のように速く、力強く……。

「ぐっ……!!」

そして、セナの腹部を思いきりその左足で蹴りつけた。

これにはデルタをはじめ、見ていたみんなが驚き　メルでさえ、何も言えなかったほど……。

「う……っ」

いくら甲羅があっても、ホノオの“ブレイズキック”で腹に衝撃を受けるのは辛かった。

怒りでパワーが上がったそれなら、なおさらだ。

呼吸を荒げながらうづくまるセナに近寄ると、ホノオはセナを見下して言い放った。

「……バカだよ、お前。

オレよりずーっとバカだ」

その言葉に腹を立て、体を起こそうとするが、ズキンとお腹が痛み、再びうづくまる。

「……何？勝ち負けだけがバトルの全てなん？」

それに、2対1だからってへそ曲げて……。それって、形にしかこ
だわってないって証拠じゃねえか」

ホノオの言っている意味がよくわからない……。

オイラは……バトルの“形”にしかこだわっていない？

「2対1って形だって、お互いに了解して楽しめれば、それは卑怯
なバトルでもなめきったバトルでもない。

いくら相手が強くても、それでも立ち向かうことに大きな意味があ
る。……さっきのヴァイスを見ただろ？」

……ヴァイス。

セナは痛みに耐えて身を起こし、ちらりとヴァイスを見る。

確かに、先ほどのヴァイスの姿勢には感心したものだ。

シギの大きな力の前で、小さな小さなヴァイスは臆さず立ち向かい
。

……気弱だったヴァイスは、どこに行っただろう？

いつオイラは、純粹に立ち向かう姿勢を忘れたんだろう？

あれこれ考えを巡らせるセナに、ホノオはさらに話しかけた。

少しずつ怒りがおさまってきている声で、そして何かを訴えるよう
な。

「お前の気持ちも分からなくはないよ……。救助隊の仕事でお尋ね
者をつまえる依頼なんか受けると、どうしても依頼を成功させな
きゃいけない。戦いに、何が何でも勝たなくちゃ。

……でも、それとこれとは別だろ？楽しむためのバトルに、余計な感情持ち込むなよ……？」

そうか、それだ。

セナはホノオの話から、何か得たものがあつたようだ。

自分が大切な何かをしばし見失っていたのは 救助隊の活動と、楽しむためのバトルを混合していたから。

日々、チームをまとめ、依頼をきっちりこなすようにと頑張ってきたセナだが、あまり精神面は強くなく、1人で考え事をして。

それ故、思考がまとまらなくなることもしばしばだった。

それで、今回も、最初に感じたいやな気持ちに、屁理屈を重ね、どんどん素直じゃなくなつて。

「…………ごめ、ん…………。ホノオ」

まだ息を整えきれずに、言葉を不自然に切りながらセナが呟く。

「…………ああ」

ホノオも少し照れくさそうに、セナから目をそらした。

そんな彼らの様子を見て、皆が安心できた。

バトルが始まってから今までのこの2人の気まずい雰囲気、辺りを重くしていたことは明らかだったからだ。

「いてて……」

ようやくセナが立ち上がれる位にまで回復したようだ。

「悪かった。……大丈夫か？」

さっきの衝動的な攻撃を思い出し、ホノオは彼らしくもなくおどおどとセナに問う。

「ふふっ……。なんか、お前がそんな態度するなんて、気持ち悪いな！」

「なんだと!？」

そのやりとりに、一同は頬を緩めた。

「あの一。そろそろバトルを再開してもいいかい？」

メルはその言葉に、セナが微笑んで答える。

「ああ、いいぜ！」

「……悪かったな、デルタ」

悪態をついたことをデルタに謝罪すると、彼は快く許してくれた。

そして、

「セナ、やるなら思いきりやろっぜ！俺は大丈夫だからさ」

デルタはこう言つと少しおどけて、セナを挑発するかのようにつきをした。

「……へへっ、分かったよ。オイラも思いつきりやる！」

その会話が交わされた後、再びメルのコールにより、バトルが動き出したのであった。

第6話：バトルって？（後書き）

セナ

「……って、今回デルタとのバトルが全然ないじゃん！」

アンタの行動が原因です。

セナ

「……ごめん」

それに、ちょうど区切りも良かったため、決着はまた次回となりました。

今回は、ポケモンの醍醐味（？）であるバトルについて考えてみると、こんな話の構成にしたのですが……。

『ホノオがなんか大人すぎるっ（汗）。病気が！？』

……と思われる方もい」

ホノオ

「いねえよ（怒）」

……ま、確かに彼は勉強ダメですが、人としての思考は浅くはないです。

セナ

「ただし、深くもないですww」

ホノオ

「すっかり口答えするようになりやがって……」(怒)

次回はいよいよ)『やっと』だろ(怒) byセナ)バトルに決着
がつきます。

なるべく早めに更新しますね

第7話・決着！！vsデルタ！（前書き）

セナ

「今回もまた短いな〜」

ええそうですね。

しかし決着ですよキミ。

ホノオ

「正直、いやな予感しかしねえ……（汗）」

では、どうぞ！

第7話：決着！！vsデルタ！

「よっし。行くぞデルタ！」

セナはデルタに向かって思い切り駆け出した。

デルタはそれをじっと見据える。

2人同時に相手では、無駄な動きはよくない。

そう判断して、先ほどとは違う最小の動きで攻撃をかわそうとしたのだ。

セナは右手を軽く引く素振りを見せた。

デルタは、てつきりセナもヴァイスのようなパンチ技を使ってくると思ったのだが

刹那、セナの尻尾が水をまとい、淡い水色に輝く。

「なんちゃって」 “アクアテール”！！」

セナはその尻尾を勢いよくデルタに叩きつけようとした。

少々反応は遅れたが、デルタは“アクアテール”の直撃は免れ、頬をかすめただけだった。

しかし、尻尾にまとう水流は激しく水しぶきを上げて、かすめただけでもデルタの体を吹き飛ばした。

体勢を整えるデルタに、今度はホノオが迫った。

彼の左手には、熱い炎が宿る。

「思い切り行くぜ！！」

「ああ………来い！」

2人は言葉をかわすと、笑みを浮かべた。

「炎のパンチ”！！”

ホノオの拳がデルタに迫り、あちらもそれに応じてきた。

「かわらわり”！！”

デルタの刀のような手がホノオの拳にぶつかり、両者は互いに押し合う。

セナはその2人の様子を見ると、自分がすべき行動を決めた。

（ホントはあんまり邪魔したくないような状況なんだけど……。でも、全力でやらないと失礼だからな！！）

首を甲羅の中に引っ込めて力をためると、目の前のホノオと必死に力比べをするデルタに、思わぬ一撃を加えたのであった。

「ロケット頭突き”！！”

背後からセナの突撃を食らいふらつくデルタ。

「よっしゃ、ナイスだセナ!!!」

ホノオがそう言うと、“炎のパンチ”でデルタを殴りつけた。

「いつてえ……!!」

地面に叩きつけられたデルタの体中がズキズキと痛む。

しかしそこで立ち上がると、笑顔を向けてセナとホノオの実力をたたえた。

「セナもホノオも、凄く強いな……ホントに!」

「だろっ なんだってホノオ様だかな」

相変わらず調子に乗るホノオに、セナだけでなく、ヴァイス、シアン、メルも苦笑い。

「へへへ……でも、なんか照れるな……」

セナは少し顔を紅くし、照れくさそうに笑う。

デルタもその笑みに答えるように笑うと、ある発言を。

「で、2人の力を認めて……。ここからはちょっと本気でいかせてもらおう!」

「……へ?」

「“本気”って、まさか……」

セナとホノオが互いに冷や汗を流して目を合わせる。

“本気”という言葉を、先ほどのシギの“ウッドパワー”のような特殊能力の使用だととらえたのだ。

バトルを眺める一同も啞然の表情を浮かべ、シギとエネに至っては、何が起こるかを把握し、心の中で終わった……と呟いた。

そんな状況にはお構いなしに、デルタは黄色のオーラを身にまとう。

これは、デルタがもつ“メガパワー”という能力で、彼が赤や白などの色のオーラをまとうことで、攻撃、防御などの能力を飛躍的に跳ね上げるのだ。

現在デルタが使用中の黄色のオーラは、その中でも最強の“バランスタイル”。
あらゆる能力が向上する。

もちろん、このような能力を持ったデルタの前では、セナとホノオ 否、それ以外にも多くのポケモンは 無力である。

そして

「一瞬で決着をつける!!」

デルタが辺りを駆け出すと、その姿は消えたように見えなくなる。

「終わりだ!“気合いパンチ”!!」

その声が聞こえた直後、セナの腹部に拳が襲いかかる。

「ぐ……!!」

すでにホノオにもお腹を攻撃されているせいか、デルタの強烈な攻撃が当たった直後にセナは気を失う。

そしてその体はとてつもない速さでホノオの元へとせまり

「こっちくんなこっち　うぎゃっ!!」

パニックに陥ったホノオは避けることもできず、セナの頭が激突し、目を回す。

状況を全て理解するのにとてつもない時間を必要としたが、しばらくしてメルがバトル終了の合図を出す。

こうして、セナ達キズナとデルタ、シギ、エネの戦いは、あちら側の完全勝利で終わったのであった……。

第7話：決着！！vsデルタ！（後書き）

……凄いですね、メガパワー（笑）

凄さがうまく伝わったかは分かりませんが（汗）

セナ

「なあ、オイラ達にも、デルタやシギみみたいな特殊能力があったりするん？」

……さあねww

でも、キミは弱いのが魅力（？）さww

セナ

「……作者嫌い……」（泣）

第8話・急げ！―勇者達（前書き）

今回のお話は、こちらオリジナルの展開です。

では、ごきげん

第8話：急げ！！勇者達

「ハア、ハア……」

いやな予感が、現在目的地に向かって全速力で駆ける“キズナ”の4人とメルを支配する。

“目的地”。

それは、異世界からやってきた、リオルのデルタ、フシギダネのシギ、エネコのエネ……の3人を元の世界に連れ帰る者が待機しているという、“臨海の丘”。

かつては美しい光景が見られたが、現在は災害のせいで何かと物騒なことが絶えないその地。

セナ達5人がその地に急ぐ理由は、彼らとデルタ達3人が別れた後にあつた。

“聖なる森”にてデルタ達とバトルをした後。

ヴァイス、ホノオ、シアン、そしてメルは、メルの家の前でデルタ達を見送った。

メルが軽く“臨海の丘”への行き方を教えると、その地に急ぐとする3人。なにやら、それだけの理由があるようだ。

その雰囲気を感じたのか、ヴァイス達も満足のいく見送りの言葉をかけられず、少々呆気ない別れとなってしまった……。

さらにこの時、デルタとのバトルで傷ついたセナは、なぜかいつまでも目を覚まさなかった。

デルタ達は心配そうな顔をするが、ついに彼が目覚めぬうちに、“聖なる森”から南に歩き出し “臨海の丘”へと向かっていったのだった。

一方のセナは、この別れの時、一人で夢の中の空間に立ち尽くしていた。

その、光に包まれているような感覚には、覚えがあった。

もしかして ……。

これから何が起こるのかをセナが予想すると、案の定、目の前に光の渦 “ポケモン”、が現れた。

「おひさしぶりです、セナさん」

「ああ……。盗賊団“スライ”と戦ったとき以来だな」

“ポケモン”とセナが軽く挨拶をする。
どこか冷え切った雰囲気は、おそらく“ポケモン”が人間を恨んでいる故だろう。

“ポケモン”は、淡々と今回現れた理由を話した。

「あなたにちょっとだけお話ししたいことがあったので、夢の中に引き止めておいたのです。もつとも、あなたなどには関係のないことなのかもしれませんがね」

「なんだよ、その話って？」

冷たい態度に少々ひるみながら、セナは答える。

「簡潔に言います。あなたが先ほど関わった、デルタさん達3人に危機が迫ります」

「……え!？」

“ポケモン”の言葉に、セナは動揺する。

「なんだよそれ!?!全然“関係のないこと”じゃねえじゃん!?!」

「……そうですか?人間なんて、他人などどうでもいいというような生き物ではありませんか。」

それに、あちら　デルタさんもまた、人間。ワタシが憎しみを抱く対象には変わりないのですから、ワタシはこの話に一切の興味はないのですがね」

「うるさい!!」

いつもは“ポケモン”に対しても穏やかな態度をとるセナだが、今は“ポケモン”を怒鳴りつける。

彼女がデルタにまでこれほどの憎しみを抱く理由が分からなかったからだ。

「あら?では、彼ら3人の危機を救いに行くと言つのですか?“救いの勇者”さん」

「当たり前だ!!」

威勢良く言い放つセナだが、次に“ポケモン”が言うことには少々心を痛めた。

「ふ。偽善ですか?

……先ほどのデルタさんやシギさんの凄まじいパワーを見たでしょう。あのような力を持つ彼らが、危機に陥るとワタシは言っているのです」

「……っ」

ただ“ポケモン”を睨むだけのセナを無視して、さらに彼女は続ける。

「それに比べて、あなたは無力。正直に申しますと、ワタシは、あなたなんかはこのガイアは救えないと思っっているくらいです。

……そんなあなたなんか駆けつけたところで、なんの役にもたちませんよ。

『助けに行つたから、偉い』。人間には、こんなくだらない考
え方に甘えている者が多いですね。本当に、嫌になっちゃいます」

「……………」

“ポケモン”の言葉で傷ついたセナは、しばらく沈黙を続ける。

「……………オイラは」

ふと、静かに口を開いた。

「オイラは、確かにすごい力も持っていないし、強くなかない。

心も、戦闘に関しても、ホント、弱いよ……………」

でも！オイラは1人じゃない！ヴァイスに、ホノオに、シアンに…

…今は姉貴だつて……………」

だから。

みんなと一緒に、頑張りたいんだ。

みんなと一緒になら、絶対にデルタ達の危機を救える気がする」

“ポケモン”が、セナを見る目には、蔑んだような光りが浮かんで
いる。

「……………だから。絶対に、デルタ達を助ける。」

そんな強い気持ちで、オイラは“臨海の丘”に向かうつもりだよ」

「どうしてですか？デルタさん達を助けることなんて、あなたになん
の利益ももたらさないではありませんか。

……………それでも向かうなんて、本当に、あなたは変わっている人間で
すね」

“ポケモン”は、どこまでも人間の事を見下し、どこまでも冷たい言葉をセナに浴びせる。

でも、これはセナの1つの目標なのだ。

いつか“ポケモン”の、人間に対する恨みを消すこと。

その思いを強く持ち、セナは穏やかな態度で“ポケモン”に接した。

「ほめ言葉として受け取るよ、その言葉……」。

とにかく、ここでこうしている間にも、デルタ達が危険な目にあっているのかもな。

……そろそろ夢からおさらばしたいんだけど……“ポケモン”」

「……分かりました」

本当に素っ気なく、それだけ言うと、“ポケモン”はセナの前から姿を消した。

すると、セナの意識が現実世界へと吸い込まれていった。

メルの家にて、静かに目を覚ますセナ。

「おっ、やっと起きたのかい！」

「よかったー！」

メルとヴァイスの喜びの声が重なった。

「よっぽどデルタにやられたのが痛かったのか？」

ホノオが、今までセナが起きなかった理由をこう推測して言うが、セナが首を振る。

「夢を見てたんだ。“ポケモン”が出てくる夢。その夢によると」

セナは全てを伝えることにした。

“ポケモン”との会話や、その時に感じた自分の強い気持ちを。

「デルタ達が、危ないんだ」

セナの言葉に動かされた他の4人。

そして一行は、急いでメルの家のドアをあけると、デルタ達が向かった。“臨海の丘”がある南へとかけたした。

そんなセナ達の様子を、“ポケモン”はとある場所から見ていた。彼女の、本来の姿になりながら。

「セナさん。これはあなたへの試練かもしれませんね。“救い

の勇者”としての。「」。

一度言葉を区切り、さらに続けた。

「ガイアを本当に救う人なら、“異世界を救う勇者”の手助けくらいでなければ、おしまいですからね」

“異世界を救う勇者”という言葉の意味するものは。

“ポケモン”は、うっすらと笑みを浮かべると、セナの後を密かに追いかけていった。

“臨海の丘”には、“はるかぜ広場”を経由して行くため、セナ達はどれほど前にデルタ達がここに立ち寄ったかを聞くことにした。

噴水の近くに、プラスルという種族のソプラとマイナンという種族のアルルがいたので、2人に質問をした。

「なあ、ソプラ、アルル。この広場に、リオルとフシギダネとエネコが来なかったか？」

セナが、よい答えをあまり期待せずに聞く。

先を急いでいたデルタ達がそれほど広場に長く滞在したとは思えないからだ。

現に、メルヤシアンは、ほかの誰かに聞き込みを開始しようとしていた。

しかし、ソプラの答えに皆が注目した。

「ああ、 “あいつら” ね」

「しってんのか！？ソプラ！」

ホノオがソプラにそう聞くと、ソプラは少し頬を赤らめながら、おう、と返事をした。

「さつきね、 “カクレオン商店” に、その3人が立ち寄っていたんだけど」

説明しだしたのはアルルだ。

「なにやらすつごく高い技マシンを売ったみたいだな。んで、カクレオンが興奮して叫びだしてよ……広場中大注目だぜ」

「本当か！？ソプラ！！」

「あ、ああ……」

ホノオのその返答に、ソプラは顔を赤らめながら答える。

どうやら、 “はるかぜ広場” までは、無事についたようだ。

ならば

先を急がなくては。

「ありがとうね、ソプラ、アルル!!」

ヴァイスが礼を言うと、5人は再び南へと駆け出す。

そんなヴァイスを見ながら、顔を紅くするマイナンの姿が、こじ、
“はるかぜ広場”に残るのだった。

無事でいてくれ。

そんな思いを込めて、5人はひたすら走りつづけた。

セナは地面の小石につまづき、思いきり転んだ。

「大丈夫、セナ!？」

ヴァイスがそう問いかけると、セナは強くうなづき、すぐに立ち上がった。

広場からそう近くはない場所……。

走りつづけたセナ達の前に、“嘆きの洞窟”という不気味な洞窟が

立ちほだかつたのだ。

「この洞窟を通るのが、“臨海の丘”への近道だよ」

メルのその言葉と同時に、5人は洞窟へと入っていった。

すっかり深夜の時間帯になっていた。

セナ達は眠い目をこすりながら、ヒトカゲのヴァイスとヒコザルのホノオの尻尾にともる炎を頼りに真っ暗な洞窟を歩く。

「なあセナ。デルタたちに危機が訪れるって、ほんとかよ？」

あくびをしながらホノオが問う。

「ああ。言つたる？“ポケモン”がそう言った……って」

セナのその返答に、ホノオは顔をしかめた。

「信用できるのかよ、あんな奴……」

しかし、彼らの前には、もうすぐ現実が広がるのだった。

「なんか、寒くない？」

しばらく歩くと、シアンが体を震わせながら言う。

確かに……と皆が頷くが、その正体は前方に目を向けると、あった。

なんと、傷ついたデルタ、シギ、エネが倒れていて、その周りを1人のゲンガーとたくさんのゴースト、ゴースが囲んでいたのだ。

怪我をして動けぬデルタを見下ろし、ゲンガーは目を光らせ、とどめをさそうとしていた。

「危ない!!」

セナが駆け出すと、他の4人も後を追うのだった。

。

第8話：急げ！！勇者達（後書き）

次回はバトルですよ！

もしかしたら、バトルの展開はオリジナルにするかもです。

セナ

「なんか、作者のバトルシーンって、個性的というか、変わってる
というか……」

確かに変わってるかもなあ（笑）

ヴァイス

「ごめんねホノオ、わざと間違ったんじゃないんだ……」

セナ

「……それって余計にヤバくね(汗)?」

……なんだこの前書きはww

第9話：戦闘開始！！

「さあ、コイツで終わ」

「させるか！ “アクアテール” ！！」

ゲンガーがデルタにとどめを刺そうとしたまさにその時。

セナは尻尾に水のエネルギーをまとわせ、ゲンガーの頬を叩きつけた。

「ウゲツ！？」

衝撃で飛ばされるゲンガーに、その子分的な存在である、3人のゴース、そして同じく3人のゴースト……。敵の注意が集中した。

「スキありっ！」

「いくよホノオ！」

ホノオとヴァイスは息を合わせ、隙のできたゴース達に“ 火炎放射 ” を放つ。

「アタイ達もやるよ！」

「ウン！……せーのっ！」

メルとシアンも視線を合わせ、ゴースト達に共に“ バブル光線 ” を放った。

攻撃を受けた敵が後退しているうちに、セナ達は傷ついたデルタ、シギ、エネに体力が回復する“ オレンの実 ” を与えた。

「あ、ありがとよ……」

オレンを受け取ったデルタがつぶやくと、3人は木の実をかじる。すると、体の傷が少しずつ治り、戦う体力も戻ってきたようだ。

「セナ達、助かった！」

「いいってことよ！」

デルタの言葉に、セナは照れくさそうに返す。

そして、皆がフツと顔に笑みを浮かべるが、ゲンガー達の気配を察知し、再び敵と向かい合う。

「邪魔しやがって……。全員まとめて地獄に叩き落としてやる！！」
怒りのこもった目つきでゲンガーは怒鳴る。

「それはこっちのセリフだつての！！バーカ！」

ホノオもカチンと来たらしく、ゲンガーに悪態をつく。

「黙れ猿。……いくぜみんな！！」

セナがホノオを黙らせて叫ぶと、“キズナ”の4人　セナ、ヴァイス、ホノオ、シアン　と、メル。そしてデルタ、シギ、エネの、ゲンガー達との戦いが始まった。

「バレットパンチ」！！

“エナジーボール”！！

デルタとシギの攻撃が敵のボスの存在であるゲンガーに迫るが

「ケツ。“サイコキネシス”！！」

ゲンガーはいとも簡単に念力の力で攻撃の軌道を反らしてしまふ。

「今度はオイラ達が……！！

“水鉄砲”！！」

「“火炎放射”！！」

“炎の渦”！！」

「“バブル光線”！！」

続いてセナ達が、4人で一斉に攻撃を繰り出す。

勢いよく迫った4人分の攻撃は、さすがに軌道を変えることは難しかったが

「お前たち！！」

ゲンガーが指示を出すと、子分が動き出す。

3人のゴースはセナ達の攻撃の正面から“悪の波動”を放ち、攻撃を止めにかかる。

もちろんセナ達の攻撃は、この程度で阻止されるほど柔ではなかったが……

その攻撃を打ち壊す作戦が、あちらにはあった。

「“シャドーボール”！！」

3人のゴーストの声が重なる。
なんと彼らは、セナ達の攻撃ではなく、直接セナ達を狙ってきたのだ。

「!！」

思わず自分達に迫る攻撃に注意がいき、セナ達の技の威力が弱まった。

すると、前方からも新たな攻撃が。

「10万ボルト」!！」

ゲンガーの電撃が、ついに4人の攻撃を破り迫ってきた。

「うわあああっ!！」

目前に迫る攻撃を、セナ達4人は食らう覚悟を決めて目をつぶった。
が、一向に痛みがない。

恐る恐る前を見ると、白いオーラを身にまとったデルタが、強力なバリアでセナ達を守っていたのだ。

デルタの能力、メガパワー……。

白のオーラは、守りの能力を強化するのだ。

「……ふう〜、サンキューデルタ。危なかったよ」

セナがホッとした顔でデルタに言う。

「かまわないさ。これで少しはキャラにしてくれよ？」

「おあいこ……っつてことだな！」

デルタ、セナが会話を交わし、ヴァイス、ホノオ、シアンもクスリと笑う。

男性陣（一応シアンも含む）がこちらで戦っているうちに、メル、エネの女性陣は、このバトルの作戦を考えていたようだが、ここで方針が決まったようだ。

「みんな、ちょっといい？」

エネの声で、戦っていた男性陣が集合する。

これから始まる作戦会議のあいだ、メルはゲンガー達の攻撃がみんなに当たらないように、自らの強力な技で相手の攻撃を打ち消していた。

「……………いいかしら？」

エネがメルと共に考えた作戦を伝え終わると、皆がコクリと頷いた。

タイプの都合や戦力を考え、ここにいる8人をチームに分ける、という作戦で、話がまとまった。

戦力のあるメルは3人のゴースを一斉に相手する。
ゴーストには、ヴァイス&シギ、シアン&エネ、そしてホノオは単身のチームで、各チーム1人ずつのゴーストと戦う。

ホノオは始め、この作戦を聞いた時に、『なんでオレ1人なんだよ!？』と不満をもらしたが、セナが『それはキミの素晴らしい実力を勝手だね』と説得すると、たちまちやる気を出した。

そして、セナはデルタと共に、ボスのゲンガーと戦うことになった。

こうしてそれぞれがそれぞれの敵の元へ向かい、新たなスタイルで戦闘が始まったのだった。

第9話：戦闘開始！！（後書き）

もうすぐ2009年も終わりですね。
早いもんだ。

次回も戦闘続きます。

すでに少しだけ次話の執筆をしているのですが……
メルの戦闘シーンは書いてて楽しいです（笑）

第10話：息を合わせて（前書き）

最近気づいたのですが……

この番外編の主要人物たちはみんな一人称の表記が違う！

セナ

「オイラはオイラだしー……」

ヴァイス

「ボクはボクだもんね」

ホノオ

「オレはオレだぜっ！」

シアン

「シアンはシアンだよ」

メル

「アタイはアタイだねえ」

……なんかキミらのセリフめっちゃ変なんだけど（汗）

そしてデルタ君は“俺”、シギ君は“僕”、エネちゃんは“私”……。

こうしてみると、皆さん個性的で楽しいですなw

では、記念すべき第一の話を、ご紹介！

第10話：息を合わせて

作戦を実行したセナ達。

ゴース3人を一度に相手するメル、現在の戦局はと言つと。

「1人だろうと、容赦はしねえぜ姉ちゃん。“シャドーボール”！」

ゴース3人が、それぞれメルを囲むような位置から漆黒の球体放ってきた。

「ふつ、アタイがそんな攻撃に当たると思つかい？」

“高速スピン”！！」

メルは甲羅に身を隠すと、高速で回転し始めた。

そして、3人の“シャドーボール”が迫る直前……

「今だ、“ミラーコート”！」

メルの体 正確には甲羅 が光り輝き、自らの回転のスピードも乗せて、凄まじい速さでゴース達に打ち返す。

「ぎゃあああ！！！！」

ゴーストタイプであるゴースは、自らのタイプの技に弱いのだ。

弱点の技を何倍にも強く、しかも3人それぞれに的確に放たれ、ゴ

ースはすぐに悲鳴を上げて目を回した。

「ふう、物足りないねえ」

メルは倒れたゴースを見ながら笑みを浮かべた。

「……でも、みんなはみんなの役割があるし……ちょっと休んで見守ってようか」

こうつぶやき、いまだバトルを続ける他のメンバー達を見守ったのだった。

一方その頃……。

「ああーっ、動きまくりでまともに当たらないじゃない!!」

自らの“シャドーボール”がすでに何度かわされ、エネは少々イラついた様子で声を漏らす。

シアンとエネが相手をするゴーストは、ふわりふわりと宙を自在に漂い、シアン達の攻撃を難なくかわしていた。

2対1で、幾分かこちらが有利になると思っていたシアンとエネだが、攻撃が当てられないのなら話は変わってくる。

「へへっ、食らいな!! “シャドーボール”!」

「キャッ!!!」

ゴーストは余裕の表情でシアンに攻撃を放ち、こちらは必死に逃げる現状。

「大丈夫? シアン」

エネが、先ほど狙われたシアンを心配して声をかけるが……

「シアンはまだまだ平気だよ」

「……はいはい」

あまりにのんきなシアンにため息をついた。心配して損した……と顔に書いてある。

ゴーストもこちらも今のところは大したダメージはないが、疲れがでているこちらは分が悪い。

ゴーストが再びシアンめがけて“シャドーボール”を放つてくると、今度はシアンはよけずに相殺を狙う。

「えいつ、“潮水”!!!」

シアンが口から勢いよく“潮水”を発射すると、それはゴーストの放った漆黒の球体とぶつかる。

その様子を、エネはじっと見ていた。

“シャドーボール”の黒い光が、水とぶつかりと拡散して消えてゆく、その様子　どこかで、見覚えがある光景のような……。

やがてシアンとゴーストの技は互いに打ち消しあい、一旦両者睨み合う。

そしてエネは、先ほどの光景からあることを思い出した。メル家の前でシアンと戦った時、自らの“シャドーボール”がシアンの“渦潮”に相殺されたことを。

(“渦潮”……。これならいけるかもしれない)

エネは心で呟くと、シアンに指示を出した。

「シアン！私が指示を出した通りにゴーストに攻撃して！」

「ウン！」

珍しく真剣な表情を浮かべるシアンに、再度“シャドーボール”が迫った。

「今よシアン！“渦潮”！」

「ええっ!?!」

シアンが驚いたのにも無理はない。

あちらが飛び道具を乱射してくるのに、それに自ら接近するとは

しかし、迷っている時間はない。

シアンは体を回転させて水をまとうと、意を決してゴーストが放った“シャドーボール”に体当たりした。

するとエネが予想した通り、シアンは“シャドーボール”を打ち消すことができたのだ。

「シアン、そのままゴーストに“渦潮”でアタックよ！」

「ウン！ いくヨ〜！！！」

シアンは一気にゴーストに接近し、渦巻く強い水流でゴーストを叩きつけた。

“シャドーボール”を放った直後だったので、隙があったのだ。

シアンの技を食らうと、ゴーストは濡れた体を地面に叩きつけられた。

すぐに起きあがろうとするが、目の前には接近してきていたエネがいた。

彼女は勝利を確信し、自信に満ちた笑顔を浮かべている。

「食らいなさい！ 最大パワーの“吹雪”よ！！！」

エネの体が水色に輝くと、強力な冷気をゴーストに放つ。

叫ぶ間もなく、ゴーストはあっという間に凍りづけになった。

シアンとエネの、勝利だ。

「やーった エネの作戦勝ちだね」

シアンは嬉しそうにそう言つと、

「大したことないわよ……」

とエネは答える。

だが、それまで飛び道具で応戦していたのに、意を決してシアンの“渦潮”でゴーストに飛び込む。

そして濡れているゴーストに氷タイプの技を使うことで確実に凍らせ……。

と、とてもシアンが1人で思いつかないこの作戦。

エネの知恵と、それを信じたシアンのチームワークの勝利だった。

一方のヴァイスとシギはと言つと　　。

「なかなかやるね、あいつ……」

シギがゴーストを睨みながら呟くと、ヴァイスが頷く。そして

「でも、勝てない相手じゃないと思うよ！」

励ましの意味も込め、ヴァイスはシギに笑いかけた。

「そうだよね。」

……“あの力”は諸刃の剣だから、いざって時にしか使わないよ」

シギが言う“あの力”とは、メルの家前でのバトルの時にもシギが使った“ウッドパワー”だ。

とても強力な特殊能力だが、それ故にシギの体力が激しく消耗されるのだ。

「……だから、頑張ろうね、ヴァイス！」

シギのその言葉で、ヴァイスも笑顔になる。

「うん！じゃあいくよ！“火の”」

ヴァイスが“火の粉”を練りだそうと口を開けた途端、ゴーストの拳がヴァイスに向かって飛ぶ。

「うわっ！！」

それをよけるのに必死になり、ヴァイスは攻撃をできなかった。

「いつ、今の技は……！？」

「きっと“不意打ち”だよ。あのゴーストを倒すには、連携攻撃で叩くかなさそうだね……」

ヴァイスに説明すると、シギは表情を険しくした。

「分かった、“せーの”で攻撃しようね、シギ！

……「せーのっ」

ヴァイスが息を吸い、シギがつばみを光らせる。

そして同時に攻撃をしようとしたが、ゴーストはものすごい速さでヴァイスに迫ってくる。

再び“不意打ち”だ。

シギが放った“エナジーボール”を軽々とよけ、ゴーストはヴァイスを拳で殴りつけた。

「わっ！！！」

勢いで押し倒されるヴァイスに、ゴーストはさらなる追撃を与えようとする。

「敵は少ない方がいいんだよ！！」「シャドーボール」！！」

黒い光の塊が、ヴァイスめがけて放たれた。

「ぐっ……！！！」

仰向けで倒れていたため攻撃はお腹に当たり、衝撃が激しい。

苦しげな声を上げた後、ヴァイスの体の力が抜けた。

「ヴァイス！！！」

シギがヴァイスを心配して駆け寄る。

しかしゴーストもそばに寄ってきたため、シギはヴァイスの様子をよく伺えずに再びバトルへと向かった。

「よくも……！！」「エナジーボール”！！”」
「1人じゃ楽だな。“シャドーボール”！！”」

シギとゴーストの攻撃は衝突し、小さな爆発が起こった。

煙のせいで、若干視界が悪くなったその時

「“シャドーパンチ”！！”」
「しまっ　　！！”」

黒いオーラに包まれたゴーストの拳がシギに迫っていたのだ。

相殺は間に合わない

そうシギが判断してギョツと目をつむると、シギとゴーストの間にオレンジ色の体が立ちはだかる。

「“炎のパンチ”！！”」

オレンジ色の体　　ヴァイスが燃える拳をゴーストの黒い拳に押しつけたのだ。

「ヴァイス！？」

倒れたはずのヴァイスを見て、シギは驚きの声を上げる。

「えへへ……」。倒れたフリ、上手でしょ？」

口ではそうおどけるが、やはりダメージを受けたのが響くのだろう……。

ヴァイスの拳が徐々に押されてきた。

「ヴァイス……」

シギがそう呟くと、体を緑色のオーラで包み、背中の種に力をためる。

体力が削られるのを覚悟で“ウッドパワー”を使用したのだ。

「ヴァイス、よけて!!」

背中にパワーを溜め終わると、シギはヴァイスに合図する。

とっさにヴァイスが攻撃を止めて右に飛び退くと、ゴーストは勢い余ってバランスを崩す。

そしてその姿をしつかりと見据え、シギが重い一撃を放った。

「必殺!! “ソーラービーム”!!」

シギが放った光は瞬時にゴーストを飲み込む。

これだけでも、充分ゴーストの負けは決定だったのだが……

(一人狙いなんて卑怯なやり方をされたんだもんね……。だったらボクも!)

ヴァイスは息を吸い、ゴーストに灼熱の炎を放った。

「追撃!“ 火炎放射”!!」

シギとヴァイスの攻撃が終わると、ゴーストはうつ伏せに倒れていた。

そしてヴァイスの瞳に映るのは、大きすぎる反動で疲労し、尻餅をつくシギの姿だった。

「シギ、大丈夫!？」

ヴァイスが駆け寄ると、シギは笑いかける。

「うん、大丈夫!……ヴァイスこそ、大丈夫？」

「うん、平気だよ!!」

ヴァイスは元気に答え、グルグルと腕を回して見せた。

ヴァイスにシギ。

お互いに少々無理もしたが、無事にゴーストに勝つことができた。

第10話：息を合わせて（後書き）

いかがでしたか？

さて今回は、ホノオの単独ギャグバトル
そしてセナとデルタ君のボス戦（？）です

ホノオ

「ああゝ！？何がギャグバトルだって（怒）！？」

……確かホノオのバトルはあちら様にはなかったはず……。
ですので、思いつきりいじろうかとww

セナ

「まだ原稿書いてないのに言わないでくれる？」

へーへー。

では、また次回

第11話：恨まれて大苦戦！！（前書き）

ホノオ

「今回はオレのバトルだ！　けど、このサブタイトルはなんだ（汗）？」

それは見れば分かりますよw

果たしてホノオのバトルはギャグか、シリアスか　？

とりあえず、前書きは簡潔に済ませて、本文をどうぞ

第11話：恨まれて大苦戦！！

メルやヴァイス達がバトルを始めたのと同じくらいの時刻に、ゴーストとバトルを始めたホノオは。

「てめーなんか一撃で充分だ！ “火炎放射” ！！」

ホノオがゴーストを挑発しつつ、真っ赤に燃える炎をゴーストに放つ。

しかし体の軽いガス状ポケモンであるゴーストは、炎が起こす強い風圧に体に乗せてふわりと攻撃をかわした。

「いいのかな？ そんなに強い技を発動しちゃって」

「なっ……」

ゴーストの意味ありげな言葉に表情をかたくするホノオ。

何か仕掛けてくるのでは……と、ゴーストを睨んでいると　ゴーストの瞳が、赤く不気味に光った。

「 “恨み” 」

ゴーストの技“恨み”は、相手が最後に使った技　今のホノオの場合は“火炎放射”　を使うためのエネルギーを削る技だ。

「ふん、それが何だっただ！ “火炎”」

再び“火炎放射”を使おうとしたホノオだが、技を放とうとする
体から力が抜け、攻撃ができなくなる。

「あ………れ？」

戸惑うホノオに、ゴーストは得意げに言う。

「さっき使った“恨み”で、お前が“火炎放射”を使うパワーを奪
ったんだ」

「卑怯だぞ!!」

「………卑怯?“戦略”と言って欲しいね」

「くっ………」

確かにゴーストの行動はれっきとした技なのだから、使用を厳禁す
る理由などないのだ。

「バカそうなお前には、“戦略”の大切さを教えてやる!!」

そう言うと、ゴーストは拳に黒い光をまとわせてホノオに迫る。

「“シャドーパンチ”!!」

「へっ………。力でオレに勝とうってか？」

ホノオはニヤリと笑うと左手に強いホノオをまとわせる。“炎のパ
ンチ”の発動だ。

「うらあー!!」

ホノオが思い切りゴーストの拳に自らのそれをぶつけると、互いの拳を押し当てたままゴーストが押されて後退する。

ホノオが押し切ろうとしたその時、また“あの技”が使われるのだった。

「恨み」

“シャドーパンチ”を使いながら、瞳を赤く光らせるゴースト。

その直後、再びホノオの力が抜け、ゴーストの拳がホノオを押し切り“シャドーパンチ”はホノオの頬を捕らえた。

「っ!!」

助走距離がなかったせいか、それほどの勢いが無い攻撃だったが、ホノオは後退しバランスを崩す。

そして、バランスを整え頬を押さえながら前方を見るが、ゴーストの姿がない。

ハッと気がついて後ろを向こうとした刹那、ホノオの背筋に気味の悪い感覚が走り、体が硬直した。

「へへへ……。俺は後ろにいたんだぜ？もういつちよ、“舌でなめる”」

「っ……!!?」

首筋をジトリとなめられると、ホノオの体に寒気が走る。

すぐに怒りの反撃をしようと思ったのだが、体が思うように動けなくなっていた。

「この技には相手を麻痺させる効果があるんだぜ？そんなこともしないんだな」

「う……るせ……」

歯を食いしばり体を動かそうとするが、力を入れれば入れるほど体が固くなるような気がした。

「それじゃ、背後から攻めることにするぞ。“シャドーボール”！」

漆黒の球体がホノオの背後から迫るが、彼がそれをかわす術もなく

「ぐあっ……！」

予測のできぬ攻撃に思わず悲鳴を上げ、ホノオは前のめりに倒れた。

「くっそ……。動けよ、オレの体……」

悔しそうにそう呟きながら立ち上がるうとするが、相変わらず体は動かない。

「さて……コイツでしとめるか。“シャドーパンチ”！」

ゴーストの声が洞窟内に響く。
当たり前のことなのだが、今更ながら、ホノオはこれを利用する方を思いついた。

（ゴーストが技を繰り出した地点はオレから近い……。今だ！！“火炎車”！！）

ホノオは体に力を込め、“火炎車”を発動した。

もちろん体がしびれるので突進攻撃はできないが、この技の効果で体が激しい炎に包まれる。

「っ！？あつちい！！」

ゴーストは炎に触れた途端に手を引っ込めた。

「へへ……。お前の声が洞窟によく響くから、場所だって分かっちゃうぜ」

完全に分かる、という訳ではないのだが、誇張していばるホノオ。

“火炎車”の炎を、防御のためにいまだにまとっている。

「邪魔な炎だな……」

手を振って冷やししながらゴーストが言うと、しばらく黙り込む。

ここでホノオは自らの過ちに気がついた。

（あつ……。音を頼りに場所がわかる　なんて言っちゃったら、アイツは声を出さなくなるじゃないか！！）

激しく後悔したホノオだが、一応耳を澄ませて辺りの音を聞く。

聞こえてくるのは、セナ達が別の敵と戦っている音だけで、当然なのだが浮遊しているゴーストに足音などない。

刹那、ホノオの体が宙に投げ出され、一瞬遅れて激痛を感じた。

「っあ……!!！」

突然の奇襲は相当応えるようで、闇のオーラに包まれたホノオは声にならぬ叫びをあげる。ゴーストの“悪の波動”が直撃したのだ。

今度は仰向けに、地面に叩きつけられた。

「仰向けになったのかあ……。さっきなら、声を出さずに“悪の波動”や“恨み”とか、やりたい放題に技を使ったのになあ」

その言葉から判断すると、どうやらホノオは先ほど“恨み”により“火炎車”も封じられてしまったようだ。

試しに力を込めるが、体から炎が出てこない。

「はあ、はあ……」

体は自由が効かないし、使った技は次々と封じられ……。絶望的な気持ちで、ホノオは呼吸を繰り返す。

「意外としぶといようなが……。今度こそとどめだ。“シャドーボール”!!！」

ホノオの真上から迫る漆黒の球体。
さすがにただやられるのはしゃくだったので、ホノオはダメもとで、まだ封じられていない“火の粉”を放って相殺を試みた。

自らの口から放った“火の粉”を見て、一番驚いたのはホノオだ。

放った火の玉は自分が思っていたよりもはるかに力強く“シャドーボール”に向かっていき、なんと相殺どころか、“シャドーボール”を破壊してゴーストに直撃したのだ。

「なっ……！？」

衝撃と戸惑いにより、うろたえるゴースト。

技本来の威力では、“火の粉”は“シャドーボール”に圧倒的に劣るのだが。

ここで不意に、ホノオはこの不思議な現象の謎がひらめいた。

（そうか！！オレの体力がピンチだから、特性の“猛火”が働いて
！！！）

ホノオの特性“猛火”は、ピンチの時に炎タイプの技の威力が上がるものだ。

（よし……。今なら“あの技”でも勝負がつく！）

勝利への道が見え、ホノオは笑みを浮かべた。

「へっ……“恨み”。これでお前のさっきの技ももう使えねえ。た

かが一撃当てただけでいい気になるなよクソガキ!!」

少々怒り気味のゴーストは、手に力をためて、巨大な漆黒の球を作り出す。

力をためて、特大の“シャドーボール”を放つつもりだ。

「はあ、はあ……。食らえ!! “炎の渦”!!」

ホノオがまだ封じられていない炎タイプの技、“炎の渦”を放つと同時に、ゴーストも特大の“シャドーボール”を放つ。

しばらく押し合う闇の球体と灼熱の渦巻く炎だが、やがて“炎の渦”が“シャドーボール”を飲み込み、ゴーストに襲いかかった。

「ぐあああ!!!!」

ホノオの攻撃だけでなく、自らの“シャドーボール”も浴びて、ゴーストは悲鳴を上げた。

「あちち!! うっ、“恨み”を」

体を締め付ける炎の中で、ゴーストは慌てて“恨み”を使うが、炎は消えない。

「あ……。その技持続性があるからさ、たとえオレの技の使用を封じても、渦本体は消えないワケ」

ざまあみろ、と表情で語りつつ、ホノオは渦に包まれるゴーストを見上げる。

しだいにゴーストは浮力を失い、“炎の渦”が消失すると地面に倒れていた。

「よっしゃ……勝った」

ああ疲れた、と言うように、ホノオはため息をついて体の力を抜く。すると、真っ先にバトルを終えて、ずっとホノオを見守っていたメル。

それから、ちょうどバトルを終えたシアンとエネ、ヴァイスとシギがホノオの元へ集まってきた。

「お疲れ、ホノオ」

メルがそう言うと、みんなも口をそろえてお疲れ、と言う。

「あー疲れた疲れた。もう体が痺れて動けねえや」

戦っている間に痺れが少々悪化し、ホノオはぐったりと呟く。

「大丈夫？？ホノオ」

シアンは口ではそう言いつつ、ホノオに近寄ると試しに腕を強めにつつく。

「んぎゃー!？」

痺れを通り越して激痛が走り、ホノオは奇声をあげる。

「ば、バカ!!!痺れてるのにつつくなつての!!!」

ホノオがシアンに怒るが、シアンはホノオを指差してケラケラ笑う。

「アハハ！！ホノオの反応おもしろーい」

ホノオはシアンを丸焼きにしようとしたが、先ほどのバトルで見事に技を封じられ、もはや体を動かさずに使える技がなくなっていた。ヴァイスとエネとシギは苦笑いを浮かべ、メルはまだ怒るまでには至らないが、腕を組んでシアンを睨む。

「えーいつ！」

シアンは今度はホノオのわき腹を軽くつつく。

「ひゃッ！！」

ホノオはくすぐったさでとっさに身をよじるが、体を大きく動かしたことでさらに痺れによる激痛が。

「のおわあああ！！！！痛えー！！！」

痛烈な叫びをあげてのたうち回るホノオを見ると、シアンは笑い転げた。

「アッハハハハ！！傑作だヨ！！！」

……もはや笑っているのはシアンだけで、戦いを終えた直後に悲惨な目に遭うホノオへの同情の眼差しだけがその場にあった。

否、正確には、同情の眼差しの中に、一つだけ“シアンへの激

怒の眼差し”が。

直後、凍てつくゲンコツ “冷凍パンチ” がシアンの頭に落ち、頭を押さえたシアンをメルが怒鳴りつけた。

その隙に、ヴァイスは持っているアイテムでホノオの痺れを治し、体力も回復させ……

そして忘れてはいけなのが、この慌ただしい面々を唾然として見ているエネとシギだった。

時はメルとエネの作戦を開始して少し経った時分にさかのぼる。

セナとデルタは、ボスであろうゲンガールの相手をしていた。

「食らえ！ “10万ボルト”」

ゲンガーが強力な電流をセナめがけて放つ。

「くっ……またオイラか……」

セナは迫る電撃を睨みつけ、技を発動する。

「“守る”！！」

淡い光のバリアがセナを包み込み、電撃からセナの身を守った。

ゲンガーはゴーストタイプのポケモンであり、彼にはノーマル、格闘タイプの技は通じない。

ところがリオルのデルタは格闘タイプであり、使用する得意技も自ずから格闘技が多いのだ。

すると、ゲンガーがとる行動は予測できるだろう。

セナを、狙うことだ。

攻撃を防ぎ、セナは安心した表情を浮かべた。

「セナ、気をつけるよ！」

デルタがセナに声をかける。

「分かってるって！」

デルタにピースをして答えると、再びゲンガーを睨みつけた。

「食らえ！ “気合い玉” ！！」

ゲンガーが、闘志のこもったエネルギー弾をセナに向けて放つ。

すでに先ほど“守る”を使ってしまったセナは、接近してくる攻撃をじっと見据えた。

第11話：恨まれて大苦戦！！（後書き）

ポケダン仕様の“恨み”は恐ろしいっすよw
最後に使った技のPPがゼロになりますから（笑）

セナ

「ポケモンだったら削られるだけなのにな（汗）」

これは小説だから、細々した数値は無視した方がいいかと思ってこ
ちらを採用しました。

そしてホノオは大苦戦……サブタイトルの通りですね（笑）

ホノオ

「シ〜ア〜ン〜（怒）」

シアン

「キヤー！ホノオこわーいっ！！」

バトルがマジになったので、その後にギャグ（？）投入！！です（
笑）

セナ

「しかもまたオイラ達のバトル短いじゃん（怒）」

ごめんよ（笑）

ホノオの単品バトルが楽しかったから、書きすぎました（笑）

セナ達の決着はまた次回！……ですネ。

第12話：共に歩もう（前書き）

えーと、いろいろと謝らなければいけないことが……（汗）

まず、あちら様の空の探険記が見事完結！！　にもかかわらず、
のろまな私がのうのとコラボ続けてごめんなさい。
更新も遅れまくって申し訳ないです（汗）

セナ

「模試とかあって、うちの作者忙しいんだよ　バカだからw」

うふふ……否定できないわ（泣）

私が志望校に受かるまでには、まだまだ実力が足りないのよ（汗）

奇跡の逆転合格目指して、勉強頑張らねば！！

ホノオ

「頑張れ〜。オレの分までw」

……アンタはせめて九九は覚えてよ、いい加減（汗）

第12話：共に歩もう

向かってくるゲンガ―の“気合い玉”を見ながら、セナは静かに息を吸う。

相手の攻撃を相殺するつもりだ。

「水鉄砲”！！”」

セナが思い切り水流を放つ。

しかし、それと同時にとある声が聞こえた。

「気合いパンチ”！！”」

デルタがセナを守ろうと、ゲンガ―の攻撃を打ちこわしにかかったのだ。

しかし、互いのタイミングは最悪。

すでにセナの水流はデルタ “水鉄砲” に気がついていないに迫り、そして彼の背中に襲いかかる。

「せ……せナ!？」

ゲンガ―の“気合い玉”に拳を押しさえつけながら、顔をしかめてデルタが叫ぶ。

「あつ、ごめん!」

すぐに攻撃を止めたが、デルタのバランスは崩れ、パンチの勢いは

衰えていた。

今にも攻撃を食らってしまいそうなデルタを不安げな瞳で見つめるセナだが、ある“名案”を思いついた。

「デルタ！ “あの力” を使えよ！！」

そう、セナ達と戦った時にも用いた、“メガパワー” の使用だ。

しかし

「俺は、あの力ばかりに頼るのは嫌なんだ」

そう言うと、デルタは歯を食いしばり拳をゲンガールの攻撃に強く押し付けた。

「デルタ……」

初めはよく気持ちが多からなかった。

時々自分の弱さ、頼りなさ、無力さに悩まされるセナにとって、デルタの“メガパワー” は羨ましかったからだ。

しかし

「そうか。　　そうだよな」

そう言うと、セナは笑みを浮かべる。

確かにあの力を使えば楽に敵を倒せるかもしれない　　けど、デル

夕みたいな考え方も、おもしろいかもな。

ついにデルタが拳でゲンガーの“気合い玉”を地面に落とすと、デルタはゲンガーが先ほどしたように手を構えた。

まさか、デルタも“気合い玉を”

セナはそう思い 案の定、デルタは闘志のこもったエネルギー弾を放ったのだが ゲンガーのそれと、パワーが違いすぎた。

「行くぜ！新技、“気合い玉”！」

その言葉から判断すると、どうやらデルタがこの技を使うのは初めてのようだった。

「悪の波動」

しかしゲンガーが放った一撃に、それは押されそうになる。やはりあちらは使い慣れた技だから

それを黙ってみているセナではない。

二つの攻撃がぶつかり合っている地点へと駆け出し、渾身の一撃を加えた。

「おりゃあ！“アクアテール”！！」

それまで黄色だったデルタの攻撃にセナの水エネルギーが付属され、水色に光り出す。

さらにセナが尻尾で“気合い玉”を押し出し、とうとうゲンガ―の“悪の波動”を破ってゲンガ―に直撃した。

「ウゲツ……！！」

ゴーストタイプのゲンガ―に格闘タイプの普通の“気合い玉”など効かないが、水タイプを帯びたこれには、辛そうな声を上げた。

「おつ、やったか！？」

すでにバトルを終えた仲間たちが駆け寄ってくる。

声をかけたのは、先ほどシアンのせいで地獄を見たホノオだった。

「ああ、やったぜ」

セナの返答が不完全にもかかわらず、うつぶせに倒れたゲンガ―はむくりと起き上がる。

「ケケケ……」

少々の傷はあるが、まだまだ体力的には余裕そうだ。

しかし

「いい加減あきらめろよ。この数じゃいくらなんでも不利だろ？」

デルタは仲間たちを見つつ、ゲンガ―に諭す。

確かに今や、ゲンガーひとりに対してセナ、ホノオ、ヴァイス、シアン、メル、デルタ、シギ、エネ……と、八人も相手がいることになる。

「ケツ、数量勝負じゃないんだよ！」

あくまでも強気なゲンガー。

「見せてやる、俺様のちか」

「ふああ……」

ゲンガーのセリフを遮ったのは、セナの大きな“あくび”だった。

「なあに〜？まだやるん？もう夜中だし、オイラ眠いしもう飽きたんですけど……」

セナが挑発じみた長いセリフを言うのにも訳があった。

“あくび”の効果でゲンガーが眠気に襲われるまでの、時間稼ぎだ。

「ウゲツ！？何だ　と……」

ゲンガーのセリフはストンと勢いをなくし、彼の体と共に地に落ちる。

デルタ、シギ、エネはもちろん、あまりにさりげないセナの技に、ヴァイス達もしばらくぼかんとしていたので、仕方なくセナが自ら種明かしをすることになった。

「にひひ〜　必殺“あくび”、大成功！」

その言葉でヴァイス達は、「ああ、それね！」と言いたげな顔をした。

「相変わらずお前はズルいんだから……」

「ホントホント〜！」

ホノオとシアンが呆れたような表情でセナを見た。

「ズルくない、戦略だ戦略　　と言つても、おバカなお猿さんのホノオ君には縁のないお言葉で・す・が」

嫌みたっぷりのセナの話し方　　もちろん冗談混じりだが　　に、
ホノオが腹を立てないわけがなかった。

「このっ！ブン殴つてやるクソセナーっ！！」

「わーっ！！」

ホノオが怒ってセナに襲いかかると、セナはおどけた様子で駆け出す　　が、元々俊足のホノオのマジギレモードにセナがかなうはずもなく、すぐに尻尾を掴まれて思い切り転倒した。

「……いつも、ああなのか？」

怪訝そうな顔で、デルタが取り残されているヴァイス、シアン、メルに問う。

「いつも、ああなんです」

ヴァイスも呆れ顔で、そして何故か敬語を使って答えた。

当事者のセナとホノオ以外は、もはや完全に傍観者。

ホノオは、「セナの脳細胞を全破壊してやるー!!」……などと訳の分からないことを言っつてセナの頭を何度も殴る。

初めはセナの悲鳴は笑い声混じりだったが、次第に悲痛なものへと。

この悲鳴は、メルのホノオへのゲンコツにより、ようやくおさまったのだとか。

一行は洞窟を抜けると、少し不気味な森で一夜をあかす。深夜に戦闘をしたこともあり、草の上に寝転がるとみなすぐに意識がなくなった。

翌朝。

「んじゃ、よろしくな」

「「じちら」そー!」

デルタとセナが握手を交わす。

セナ達は、デルタ達が元の世界に戻るまでの旅に同行することにしたのだ。
もう少し一緒にいたかったし、彼らが再び危険な状況にならないという保証はなかったからだ。

「ヴァイスも、よろしく！」

「うん、シギ！」

「シアン、よろしくね」

「シアンこそ」

セナ達が握手を交わすとすぐに、ヴァイスはシギ、シアンはエネと握手をするが

「……………なあ、オレは？」

輪に入れなかったホノオは、自分を指さして不満げに言う。

セナとデルタは視線をぶつけ、意味ありげにニヤけると、言った。

「あれ？いたん？」

軽くからかったつもりだったが、ホノオはかなりご立腹のようだった。

沈黙が、それを裏付けている。

「どうやらお前らをブン殴って、オレの存在を焼き付ける必要があるようだな……………」

じりじりとセナとデルタに迫るホノオの雰囲気、2人は若干の焦りを覚えた。

「に、逃げるぞデルタ！」

「おう！」

セナの合図で2人は一目散に逃げ出す。

「待てやコリアー！！！」

ホノオは拳をぐっと握りながら、セナとデルタの後を追うその様子を、残りの面々は呆れ顔で見るのだった。

こうして、デルタ達が元の世界へと戻るための、愉快な旅が始まった。

第12話：共に歩もう（後書き）

できれば今週中に、コラボ終わらせたいです。

本編の更新はおろそかにできませんし……ね。

あちらではあったシーンを端折るかもしれませんが、ご了承ください。
い。

もちろん、読者様が読みやすいような文章を心がけるのは当たり前ですので、ご安心ください！！

このコラボ小説も、一つの形が残る作品として、恥ずかしくないような仕上がりいたします！！

第13話：夜空の下で（前書き）

いやあ、執筆頑張りました。

なるべく早く完結させたくて。

セナ

「ま、こんなペースじゃ、今週中の完結はムリっぽいがなw」

今週末は模試があるんだよう

（ ; ; ）

第13話：夜空の下で

デルタ達が元の世界へと戻るには、“臨海の丘”に行かなければならない。

ゼナ達が“臨海の丘”を目指す旅をしていた、あるよることだった。

「漆黒の丘」　　ってのは、あとどれくらいだ？」

首を傾げてメルに問うのはデルタ。

その問いにメルは曖昧な表情をしたが、ヴァイスは肩から下げているバッグからガイアの地図を取り出し、自らの尻尾にともる炎で地図を照らす。

「ここからそんなに離れていない……。明日のお昼すぎくらいにはつけるかもね！」

ヴァイスのその言葉で、皆が明るくなる。

最も、“漆黒の谷”はあくまで経過地点。

その上少し不気味な雰囲気のようなだったが、少しでも早く帰れるのなら。。。

そう。デルタ、シギ、エネの3人には、元の世界へと急ぐ理由があったのだ。

ミュウツーを倒すために。。。

「もうすこしだな。頑張って行こうぜ、みんな！」

セナが声をかけると、多数の頭が上下した。

この後、一度はみんなが眠りについたかのように思えたのだが、デルタがセナに呼びかけ、2人が焚き火越しに向かい合って話をした。

デルタはセナ達があの時 “嘆きの洞窟” でゲンガーたちに襲われていた時、助けにきてくれたのかを疑問に思っていたようだ。

「どうしてあの時、ピンチの俺達の居場所が分かったんだ？」

デルタのその問いに、セナは答え始めた。

「お前達のピンチを、教えてくれた奴がいたんだ。正直、敵か味方かわかんない奴なんだけど……。とりあえず、そいつの言葉を信じてみた」

“ポケモン”を思いながら、セナが話すと、ふうん、とデルタは頷く。

そしてこの後、互いの世界のことや、仲間達のことを少しばかり語る。

一通り会話が終わると、2人は目を合わせ、そして、焚き火を消して、眠りについた。

全員が寝静まっていたかと思いきや、実は、セナとデルタが寝静まるのを待っていたものがいたのだ。

「気になって眠れないや……」

そうつぶやき、どこかへトボトボと歩き出すのはシギだった。

そしてその後を、エネが追う。

2人そろって崖に来て、隣に座ると、話を始めた。

「……エネ、帰れると思う？元の世界……」

「帰れるでしょ、きっと……」

少し力ない会話。

少々重いその雰囲気の中、2人の元へ現れたのは

「よっ！お前ら眠れなかったんだ」

「ホノオ……」

シギとエネは声を合わせて、現れた者の名を呼んだ。
ホノオもまた、眠れなかったようだ。

「よいしょっ……と」

そう言いながら、ホノオはシギの隣に腰を下ろした。

「悩み事の相談だったら、このホノオ様にお任せ！
どんな悩み事も、一瞬で解決してやつから」

無駄なほど自信満々な彼を見ると、胡散臭いと感じずにはいられない。

しばらくホノオに怪訝な眼差しを向けるシギとエネだが、やがて口を開く。

「どうやら、悩み事とは別に話したいことがあったようだ。

「ホノオも元人間なんでしょ？」

「ああそうだとも。それがなにか？」

シギの質問に軽く受け答えすると、今度はエネが質問する番だった。

「アンタはデルタやセナと違って記憶があるのよね？例えばどういうこと？」

「そうだなあ、例えば、オレが小5ンとき、初めてテストで0点取って、思えばあれが、オレの転落の始まりだったんかなあ」

あまり有益でない、いらぬ情報を手にしたシギとエネ。

「もっと別のことを聞きたい、と思った。

「ほかに？」

「すつげーよく覚えてるのは、小6の修学旅行ん時のことだな。オレとセナは泊まりの部屋同じだったんだけど、アイツ寝起き悪くてさ！朝に同室のメンバー5人がかりで、必死にセナを起こしたん

だぜ！結局どうやってセナが起きたかというところ

はあ、また、いらぬ話か……。シギとエネは顔を見合わせてため息をつく。

「他に人間の時の事で覚えてんのは、オレの小3の時の担任とめっちゃ相性悪かったってことと、中1の時の“クラス対抗球技大会”でオレらのクラスが優勝したことと、小4の時の肝試し大会とかな……。みんなめっちゃビビっててウケたわ〜！」

完全にホノオの思い出話になってしまい、シギとエネはあきれ果てる。

本当は、デルタが人間になったヒントを得ただけなのだ。

「ちょいと辛かったのは」

いい加減話をやめさせようと思っていたとき、急にホノオの声のトーンが落ちた。

思わず引き込まれる2人。

「オレの親、離婚してさあ、オレはお袋についてって、引っ越した。そんでセナともお別れして、互いに遠い街に住んでんだ」

さらりと言うホノオだが、その言葉はシギとエネを驚かせた。セナとホノオが遠く離れて暮らしているなどと想像していなかったからだ。

「……そっか。ホノオも意外と大変だったんだね」

そのシギの“意外”という言葉に否定の反応を見せつつ、ホノオは

再び話し出す。

「んにゃ。一番大変だったのは、セナなんだ。あんなチビな奴が、あんなに重いモンを抱え込まなきゃいけないなんて」

遠い目をするホノオだが、すぐにハツとして、苦笑い。

「はは、オレさつきから、何話してるんだろ？　なんか、今夜は人間の時のことをいろいろ思い出しちまって……そんで今まで起きてたんだ」

「ホノオは、人間に戻りたい？」

シギから聞かれたその一言に、ホノオはうーん、とうなり声を上げて考え込んだ。

「どうだろ……？　正直、よくわかんないや。セナやデルタは、どう考えているんだろうな　？」

デルタのことも話にでて、シギとエネも考え込む。

どこか、切なそうな顔をしていた。

「やめやめ！　今はこんなこと考えてもどーしよーもないもんな！」

暗い雰囲気無理やり転換しようと、ホノオは話題を変えた。

「そうだな……。もしかしたら、この話なら、デルタが人間になったのに関係がある　かもしれない」

ホノオのその言葉に、シギとエネは食いついた。

「オレ達をこのガイアに連れてきたのは“ポケモン”って奴なんだけど」

「“ポケモン”？」

シギとエネが聞き返すと、ホノオは今までの“ポケモン”とのやり取りをシギとエネに語って聞かせた。

最も、ホノオは“ポケモン”に対してあまり好意的な感情は持っていない、むしろ“ポケモン”を嫌っている。

よって、話の中にはいくつもの偏見が見られたのだが、それは、人間をひたすら見下す“ポケモン”とて同じ。

“どっちもどっち”といったところだ。

「なるほど。参考になったよ」

ホノオの話が終わると、シギがなにかを思い出すように呟く。

「何か 分かったのか？」

その様子から、シギに問うホノオ。

答えるのはエネ。

「デルタの夢には“ミュウ”ってポケモンが出てきて、デルタといういろと話をしているみたいなの。なんか、そっちと似てるわね」

「うーん、なるほどな」

今度はホノオが気になる情報を手にした。

思案の末、言葉を漏らす。

「そのミュウって奴がデルタの前に現れるのって、デルタに何らかのヒントを与えるためだったりするんだよね……。分らないことは多すぎる……。けど、それってやっぱり、オレ達は何らかの使命があってポケモンになったってことだよな？」

「うん」

頷いたあと、シギはさらに続ける。

「僕たちの使命は、ミュウツーを倒して世界を守ること。だっておもつな」

シギとエネが目線を合わせ、力強く頷いた。

「そっちはもうハッキリしてるんだな。オレ達はまだ全然だ。ガイアの破壊を防ぐのが目的らしいけど、正直、なにをしたらいいのやら」

ホノオは笑いながら言う。

そして、うつすらと悟ったのだ。

オレ達の冒険は、まだまだこれからだ。と。

「ありがとだね、ホノオ」

しばらく雑談したあと、シギとエネが声を揃えて言う。

「いいっていいって！」

ニッコリと笑うホノオの表情が、突如光に照らされた。

「朝日だ……」

光の源を見据え、声を漏らすシギ。

「……目的地まで、もう少し。頑張ろうな、シギ、エネ」

「うん」

その会話を終えると、3人は皆の元へと戻る。

そして、いよいよ彼らの旅も終わりに近づくのだった。

第13話：夜空の下で（後書き）

ホノオ

「またオレが目立った」

セナ

「作者……オイラのこと嫌いなん（泣）？」

い、いやあ、そんなことないけど……

あちら様の流れを元に内容を膨らませていたら、どうしてもホノオ
サイドの会話が思いついてね……（汗）

ヴァイス

「セナなんていい方じゃない……」

シアン

「シアンなんて、名前すらでてないヨ（泣）」

あれ？

“ 思案 ” って言葉は使ったんだけどな

思案

「作者さん……嫌い（泣）」

第14話：賑やかな思い出（前書き）

本当はきのう投稿するはずだったのですが、文をケータイに打っているとちゆうにデータが綺麗に消えちまいましたorz

セナ

「あーらら……（汗）」

しかし、活動報告で励ましのお言葉をいただき、執筆再び頑張りました（笑）

今回はコメディシーンは割と上出来かと……w

セナ

「では、どござ」

第14話：賑やかな思い出

次の日。

太陽が高々とあがっている時分、セナ達は予定通りに“漆黒の谷”にたどり着いた。

そして、この谷を抜ければ目的地“臨海の丘”はすぐそこである。

彼らの旅も、いよいよ終盤にさしかかったのだ。

“漆黒の谷”はとても凹凸の激しい地で、谷底は陰のせいで昼も薄暗い。

そんな、あまり気味のよくない場所だった。

しかし、現在セナ達がいるのは低い土地であり、そのまま素直に谷底を歩いた方がよほど早くこの谷を抜けられるのは明らかである。

デルタ、シギ、エネ。

この3人には、元の世界に早く戻らなくてはならない理由があったのだ。

ミュウツーを倒すために。

よって、急いでいる一同はヴァイスとホノオの尻尾に灯った炎の光を頼りにして、暗い谷底を照らしながら進むことにしたのだった。

昼であるにも関わらず谷底は不気味なほど薄暗く、ひんやりとしている。

が、しかし、不気味な雰囲気ではあるが、意外とトラブルは少なく一同はすでに一時間ほど歩いていた。

「なあセナ。あとどのくらいでこの谷を抜けられるんだ？」

歩きながら、デルタはふとセナに尋ねる。

「ん。もう半分は過ぎたぜ。この谷は上に大きいけど、意外と広くないんだよ。ま、だからこんなに谷底が暗いんだけどな」

ヴァイスの尻尾の光で地図を照らしながら、セナは説明した。

その言葉を聞き、もう少しだ、と奮い立つ者も多かったが、彼女はため息をつく。

「どしたノ？エネ」

ため息をついた彼女、エネに、シアンは尋ねる。

相変わらずの、脳天気な口調で。

「うん……。もうすぐこの旅が終わっちゃうんだよね、って考えてて」

その一言で、みんながハツとした。

目的のために急ぎがちな旅だったが、何度も助け合い、そして冗談を言い合ったりもした。
そんな思い出が、皆の中を駆け巡る。

「寂しくなるね」

静かに呟くヴァイス。

その言葉でさらにしんみりとした雰囲気が強まり、それはシアンでさえ発言ができぬほど。

そんな中で、やはり皆を励ますのは彼女だった。

「なーに沈んでるのさ？ シャキツとしな、シャキツと！」

メルがパンパンと手をたたきながら笑顔でいう。

「今はまだ、思い出を増やす時期だろう？ そんなに暗い思い出を作つてどうすんだい？」

その言葉で、雰囲気も明るくなり、次第に一同の表情も明るくなる。

「そつだよネ」

そう呟くのはシアン。

「ホノオも前に言ってたモン。旅は楽しむものだって」

「へ？オレが？」

身に覚えがないらしく、ホノオは間拔けな声を上げて自分を指差す。

「まあ、ちよつと違うセリフだったんだケド、みんなに教えちゃう
ネ

ホノオがネ、ポケモンになって良かったのは『お前シアンと旅ができてい

「
だああああーっ！！言うなああ！！」

シアンの言おうとしていることが分かり、ホノオは顔を赤くして声を張り上げ、シアンのセリフを遮った。

しかし……。

「何だつて、シアン？」

「むぐうー！！」

セナはホノオの口を押さえつけ、言葉を封じる。

その時にホノオの鼻まで覆ってしまい、ホノオは苦しそうにもがくが、ここで手を離してしまうのはもったいない。

「そこんどこ、もーちよい詳しく」

すると今度はデルタが加勢し、暴れるホノオの体を押さえつけ、シアンの言葉の続きを待った。

「すっかり打ち解けたよね、みんな」

その、遠慮いらずのやりとりを見て、シギが微笑んで呟く。

その言葉を聞くと、事態を傍観しているヴァイス、エネ、メルは頭

が上下したのだった。

「はあ、はあ……」

シアンの発言後、セナとデルタから解放されたホノオは、久しぶりにまともな呼吸を始めるが、すぐに思い切りむせていた。

「ふむふむ、なーるほどな」

セナはそんなホノオを見ると、ニヤリと笑いながら言った。

「ホノオがシアンと、オイラ探しの旅してるときに、『オイラが記憶をなくしたのが良かった』みたいなことを言って」

「その理由が、『お前と旅ができてからさっ!』」　　なんだ。
ふーん。ふふ!」

セナに続き、デルタもシアンの話の内容をいちいち丁寧に繰り返す。それがホノオをさらにからかうためだということは、その表情から理解できた。

「てめえらいい加減に　　ケホ、ケホっ!」

怒りをぶつけようとしたホノオだが、まだ呼吸が整わず、再び激しく咳き込んだ。

「殺す気がつてんだ。バカ……」

容赦のない仕打ちに、思わず文句が漏れた。

そもそも、ホノオがその、“いわゆるクサイセリフ”を言ったのにもわけがあったのだ。

『セナが記憶をなくしたのが良かった』と呟いてしまった本当の理由を言えなかった、そのためのごまかしであって。

それがまさか、こんな後々までイジられる要因になるなんて。

「だー、もう！ー！何でも言え、ちくしょーっ！ー！！」

仰向けに寝転がって、投げやりにホノオは叫ぶ。

その様子を見たみんなは大笑いをし、ホノオの叫び声とみんなの笑い声が、谷底に響く。

そんな、平和な雰囲気　貴重な思い出作りの最中を邪魔する者がいた。

「お前らさつきからうるさいぞ！ー！！」

その言葉と共に、上方から漆黒の衝撃波　“悪の波動”がホノオめがけて飛んできた。

すでに薄暗いこの谷底に一時間近くいた一同は目が慣れ、それをしつかりと目でとらえることができた。

ヴァイスやホノオの明かりもあり、なおさらなのだが。

寝転がっているホノオは対応しきれず、迫る攻撃に耐えようと、ギョツと目をつむった。

しかし、その直後、“アイツ”の音が聞こえる。

「“守る”！！」

セナだ。

ホノオに近寄ってシールドを張り、彼を攻撃から守ったのだった。

「サンキュ」

「おっ」

ホツとした表情を浮かべつつ、ホノオは立ち上がる。

すると再び、“悪の波動”を放った者の音が聞こえた。

「ほほう……。オレっちの攻撃を恐れないたあ、いい度胸じゃねえか、水色のおチビちゃん」

「おっ、おチビちゃ　！？」

“チビ”という言葉に敏感に反応するセナ。

普通のゼニガメよりも小柄な彼には、“チビ”は痛い悪口なのだ。

「まあ」

拳をグツと握っているセナに構わず、その声の主は続けた。

「何よりもほめるべきなのは、オレっち達の快適な睡眠を平気でぶ

っ壊す、その度胸だな！！」

そう言うと、上空から声の主が降りてくる。多数の仲間を引き連れて。

「囲まれた……」

「すごい数だよ……」

辺りを見回しながら、思わず声を漏らすデルタとヴァイス。

姿を現した声の主は、白いあごひげのような毛を生やし、頭の形はシルクハットのように。どうやらその群れのボスらしいポケモン、ドンカラスだ。

その他にも、カラスのような容姿のポケモン、ヤミカラスがセナ達の周りを囲んでいるが、暗闇に黒い体が溶け込み、その数が正確に把握できない。

「オレっち達はなあ、夜に活発になる夜行性で、今はぐっすり寝てたわけ。それをおまえ達は、自分達が起きているからって辺り構わず騒ぎやがって……」

このオレっちの美容と健康のための睡眠を邪魔するなんて、なんたる無礼」

ドンカラスの後に続き、あちらこちらでヤミカラスが「そうだそうだー！！」などと同意をする声が聞こえた。

「あは、悪い悪い。オイラ達、おまえ達がここに住んでるの知らなくてさ」

苦笑いしながら、必死にドンカラス達の怒りを鎮めようとするセナ。その努力は、彼の一言で散った。

「へー。アナタみたいなおデブさんでも、美容や健康に気を使ってるんだネ〜」

「バカ！！！」

皆がすぐにシアンの言葉をかき消そうとしたが、時すでに遅し。

ドンカラスが、自らのポテツとした膨れたお腹を見つつ、わなわなと震えている。

それを見て、ヤミカラス達がざわめく声が聞こえた。

「うわぁ、ボスの一番のコンプレックスに触れちゃったよ」

「これは相当酷くボコられるね」

その言葉を聞いて不安をあおられる一同だが、1人だけ頬を膨らませていた。

「“コンプレックス”だぁ！？さっきオイラを“チビ”呼ばわりしたデメーが言うなや！！」

先ほどの言葉をまだ引きずっていた、セナだ。

「ま、まあまあセナにドンカラスさん。お互い確かにチビとデブなんだから、ここは素直に認めましょうぜ」

彼なりに状況を鎮めようとしたのだろう。

しかしこのホノオのセリフが、震えていたドンカラスの怒りを解放

する決め手となった。

「ガキ共……。生きては返さねえ！！やれ、お前たち！！」

ドンカラスの怒声と共に、命令されたヤミカラス達が一斉に“黒い霧”を放つ。

「うわぁ！？」

皆の声が重なる。

辺りは漆黒に包まれ、何も見えなくなった。

「もーっ！みんなおバカなんだからー！！」

ヴァイスは見事なりレーでこのピンチを作り出したシアン、セナ、ホノオに非難の声を上げた。

「過ぎちまったことはしょうがないね」

「次のことを考えましょ、ヴァイス」

そこで彼を冷静にさせたのは、メルとエネの女性コンビだ。

「さて……。どうしようか」

暗い、暗い、霧の中。

セナは冷静になって目を閉じ、突破口を探し始めたのであった。

第14話：賑やかな思い出（後書き）

いやあ、バカがピンチを呼んだねえw

ヴァイス

「まっただよー!!」

セナ&ホノオ&シアン

「……反省してます（汗）」

メル

「アタイはセナはチビの方が可愛いと思うけどねえ……」

セナ

「チビだからってなめられるのがイヤなんだってば（汗）」

ヴァイス

「でも、セナはおチビでドジだからかわいげがあるんだよ、きつと

（笑）！」

セナ

「誉めながらけなさないでくれる（泣）？」

ホノオ

「ま、ドンカラスみたいなメタボほど深刻な悩みじゃないと思うがねw」

ドンカラス

「誰がメタボだーっ!?!」

一同

「あとがきに出てくるなーっ (汗)!!」

……あれ？コイツも“飛来”するタイプ (笑)？

第15話：漆黒の谷での戦い（前書き）

ただいまの時刻……

午前3時50分……。

セナ

「おーっ、すっごい夜更かしw」

なかなかやることが片づかなくて……でも、最近全然更新してないし、ちよつと無理に頑張りました（汗）

セナ

「明日の授業、寝るなよ（笑）」

明日というか、もはや“今日”だし……（泣）

第15話：漆黒の谷での戦い

「くそっ……なんにも見えねえ！」

辺りを覆う漆黒にホノオが腹を立て、悔しげに叫ぶ。

「辺りが見えないんなら、いろんな方向に攻撃すればいい話さ！みんな、準備しな」

メル の提案で、各々が違う方向を向く。

8人もいれば8方向に同時に攻撃できるので、この方法はなかなか有効であるように思えた。

「いくよ！せーのっ！」

メル の合図で、セナ達の攻撃が一斉に“黒い霧”を切り裂く。

しかし、悲鳴等が聞こえないことから、どうやらヤミカラス達には当たらなかったようだ。

それもそのはず。

空を飛べる彼らには、“上に逃げる”という選択肢があるのだ。

(くっ……)。

味方にさえ当たらなければ、“吹雪”のような全体技が使えるんだけどねえ……)

有効な策にまとわりつく、痛すぎるデメリット。

メル の策が消え果てると、先ほどの攻撃を地上でかわした数匹のヤミカラスが、気を利かせて再び“黒い霧”でセナ達の視界を奪う。

「よし……。そのまま急降下だ、お前達！」

「了解！」

上空に舞う黒い集団のボス、ドンカラスの命令により、ヤミカラス達は鋭いくちばしを地面のセナ達に向けて、体を急降下させた。

何か仕掛けてくる……。

それは声でわかったのだが、しかし、それしか分からぬセナ達の体に突如激痛が走る。

「うわあーっ！ー！ー！」

腕を、頬を、お腹を……全身を傷つけるヤミカラス達の攻撃で、悲痛な皆の悲鳴が重なった。

辛い猛攻が終わる。

「うっ……」

防御力のあるセナでさえ苦痛で地面にひざを突くと、傷を負った仲間達の喘ぎが重なっていた。

「そろそろ終わりにしよう……。お前達、いくぞー！」

ドンカラスの命令で、敵がとどめを刺そうとした。

「“悪の波動”ー！」

幾重にも重なった暗黒の衝撃波が、セナ達に迫る。

「うわああ!!」

「キヤー!もうダメだヨー!!」

攻撃の激しさに、思わず諦めに近い悲鳴が重なる。シアンの甲高い声が、ひときわ目立った。

しかし、まだ諦めていない者もいた。

必死に策を練るセナ、メル、エネに、この時“何か”を感じていたデルタだ。

(くそ……)。

奴らがどこから攻撃してるかさえ分かればな……)。

“悪の波動”の正面から攻撃をぶつけてそれを押し切りさえできれば、確実に技の使い手にダメージを与えられるのに……!)

攻略法を見つけても、為す術がない。

とうとうセナも攻撃を食らうのを覚悟で、目をつむった。

一方、感じた“何か”について静かに分析するデルタ。

(“何か”を感じる……。これは……!ヤミカラス達の“波動”だ!)

悟った途端、デルタはハッと目を見開く。

リオルであるデルタの進化系は、波動を見分けることができるポケ

モン、ルカリオだ。

おそらく彼にも、この能力の欠片が宿っていたのだろう。

再び目を閉じ、集中すると、今度は明確に技の方向が見えた。

「あつちだ!!」

目をつむったままデルタは上空に指を突き立て、皆の視線が集まる。

「上から“悪の波動”が来る。みんな、思いっきり攻撃をぶつけるんだ!!早く!!」

唐突な話だが、目前に迫った“悪の波動”の前ではつべこべ言うてはいられない。

一度は臆した者達も、再び希望を見据えて上を見た。

「ああ、デルタ!

じゃあいくぜみんな!

せーのっ!!」

セナの合図と共に、皆の攻撃が重なって“悪の波動”にぶつかった。

先ほどヤマカラス達に攻撃されていたせいで、すでに痛手を負っていたセナ達だが、それが逆に幸いしたようだ。

ピンチになると自分のタイプの技の威力が跳ね上がる特性を持つものが多数だったからだ。

セナ、シアン、メルの特性“激流”に、ヴァイスとホノオの“猛火

”。そしてシギの“深緑”のおかげで、強力になった8人の攻撃は“悪の波動”を容易く打ち破り、攻撃を放っていたドンカラスと多数のヤミカラス達に痛恨の一撃を加えた。

「ぐわあああ!!!」

そのことを裏付けるように、彼らの悲鳴が辺りに響き渡る。いまだに“黒い霧”が晴れない中だが、自分達の成功を悟ったセナ達は笑みを浮かべた。

「くそ……よくもオレっちの子分達を……!!」

悔しそうな、ドンカラスの声。

その背後では、先ほどの一斉攻撃にやられたヤミカラス達を心配する、無事なヤミカラス達の声。

どうやら全てのヤミカラスを倒したわけではないようで、ドンカラスに至っては無傷のようだ。

「“悪の波動”を乱射だ!“黒い霧”も切らすな!!!」

ドンカラスが苛ついたような声で指示を出すと、まだ戦えるヤミカラス達が動き出した。

「うわわ!!!マズいよ!!!」

視界の悪さは相変わらずだが、危なそうな雰囲気を感じたヴァイスは焦りの声を上げた。

そんな時

「“守る”!!!」

響くのは、メルの声。

彼女の光のシールドがヤマカラス達の攻撃から味方の身を守った。

「オイラも手伝うぜ!!!」

そう言うと、セナも両手を広げ、メルのシールドの内側にさらなるシールドを作り出した。

「さあ、作戦会議だ！時間はないよ」

メルの一声で、皆の表情が引き締まる。

「デルタ!!!アンタ、敵の攻撃の方向が分かるんだね？」

「ああ、よく分かんないけど、“波動”のようなものを感じるんだ」

「えっ!すごいやデルタ!!!」

「いつの間にそんな力を!?!」

メルの問に対するデルタの受け答えに、シギとエネは驚きの声を上げた。

「そんじゃ、デルタは指示を出しておくれ!アタイ達は、デルタの指示通りに動くから!」

メルの提案に皆が頷くが

「待った！ 姉貴、もーちよい“守る”を頑張ってくれ！」
声を張り上げたのはセナだ。

「あのさ、みんながバラバラに動くのって難しいと思うんだ！デルタだってそんなに一度に指示できないだろう？それにこっちがひとりで攻撃しても、あっちに破られるかもしれない」

思わず感心してしまうような程の早口で、セナは“守る”を使用したまま意見を述べる。

「だからさ、連携とれるもの同士で組になれば良いと思うんだ。

オイラはヴァイスと。んで、ホノオとシアンが組。シギとエネが組。姉貴は単独でいいや！

「どうかな？」

「アタイは賛成だよ」

メルという言葉に、再び皆が頷く。

「よし、じゃあみんな、ペア同士力を合わせるよ！デルタは指示を頼んだ！」

セナが気合いを掛けると、指示されたペア同士が近寄り、共にシールドの外の、霧に覆われた世界を見つめた。

セナとペアのヴァイスは、セナに近寄り真剣な表情を浮かべる。

「もつ……“守る”も限界だ……。姉貴、『せーの』で解除するぞ
！！」

「ああ!!」

いよいよ作戦実行。

集中力を高めるためにデルタが目を閉じた途端、セナの声が響く。

「せーのっ!!」

フツと、静かにシールドが消滅したその瞬間、デルタの鋭い指示が聞こえた。

「セナヴァイス!!前方に攻撃だ!!」

「あいよ!!」

「よーし!!」

セナの攻撃“水の波動”と、ヴァイスの攻撃“火炎放射”が重なり合い、黒い空間を引き裂く。

するとすぐに、技と技がぶつかり合った爆発音が聞こえ、一瞬の後にヤミカラスの悲鳴が。

「メルさん上!!シギエネはあっちに!!」

あちこち指を指しながら、デルタは忙しそうに指示をする。

指示に従い放たれた皆の攻撃の直後には、必ずヤミカラスの悲鳴が聞こえる。

「ホノオシアン、あっち!!かなり強いぞ!!」

「任せとけ!!」

「やってやるヨー!!」

ホノオとシアンにも指示がでて、彼らは久々に息を合わせて攻撃を放つ。

デルタの言うとおり、数人で放ってきたのか、あちらの攻撃の勢いはなかなかだった。

「シアン、負けるなっ!!！」

「言われなくてもッ!!！」

互いに励ましあい攻撃を続けると、やがてホノオとシアンの炎と水が、ヤミカラスの“悪の波動”を押し切った。

「セナヴァイス、あっち!!これで……最後だ!!！」

「よっしや!!！」

「いっくよー!!！」

一段と気合いを入れて攻撃を放つと、すぐに爆音、そして悲鳴。

デルタが“最後”と言ったように、ヤミカラス達の群はこれで全員が気絶し、残るはドンカラスだけとなった。

また、今まではヤミカラスの大群が役割分担をすることでセナ達の周りに“黒い霧”がまとわりついていたのだが、ヤミカラスが戦闘不能になったことにより、視界が晴れる（といっても、この谷底は元々薄暗いのだが）。

「くっ……」

危機的状況に、うるたえるドンカラス。
20近くいたヤミカラス達が全て戦闘不能になり、一気に1対8に
なってしまった。

無傷とはいえ、さすがにこの状況ではドンカラスが諦めると判断し
たセナは、1人ドンカラスに歩み寄る。

「なあ」

小さなセナは、ドンカラスを見上げるように話しかけた。

「昼寝の邪魔をしたのは悪かったよ。おデ　いや、変なことも言
つちまって、ごめん」

うっかり“おデブさん”と口にしようになったセナだが、なんとか
ドンカラスには悟られなかったようだ。

「だからさ、もう戦いは止めようぜ？オイラ達はとっとココから
去るからさ」

「……ああ。そうしよう」

セナの提案に、ドンカラスは静かに同意する。

その言葉を聞いて微笑んだセナは、くるとドンカラスに背を向け
て、皆の元へと戻ろうとした。

「　なんて」

その刹那、ニヤリと笑うドンカラスから、こんな声が漏れる。

「『そうしよう』、だなんて簡単に言うわけないだろう!! “だまし討ち”!!」

前言撤回したドンカラスは、突如鋭い目つきでセナの背中を睨みつけると、彼の後頭部に鋭いくちばしを思い切り突き立てた。

「うつ……!!」

予測のできぬ不意打ちに、セナはうつ伏せに倒れ込む。

「セナ!!」

セナを心配した仲間達の声が重なり、皆一斉にセナの元へと駆けつけた。

「大丈夫!？」

ヴァイスがセナの体を起こしてみると、気を失ったのか、全身の力が抜けていた。

「てめえ……!! 卑怯だぞ!!」

「サイテー!!」

ホノオとシアンがドンカラスに非難の声を浴びせた。

「ふふ。バカみたいに何でも信じ込むこのバカが悪いんだ」

ドンカラスが得意げにそう言った途端、ヴァイスはセナの体がピク
リと動くのを感じた。

するとすぐにセナは勢いよく立ち上がり、油断しきったドンカラス
の元へと走り出す。彼の右手には、鋭いつららが。

「バカはお前だ！ “冷凍パンチ” ！！」

「ぐっ……！！？」

つららがドンカラスに直撃し、重いドンカラスが思い切り吹き飛ば
どうやらセナは倒れたふりをして、反撃の機会を伺っていたようだ。

「このクソガキ……！ぶっ潰してくれろ！！」

完全にカンカンになったドンカラスは、セナ達8人と戦うという、
無謀な選択肢を選んでしまう。

「それはこっちのセリフだ！！みんな、いくぞ！！」

「おーっ！！」

こうして、極めて安易に結末が予測できるバトルが始まり。それ
はすぐに、1人の悲鳴により終わりを告げたのだった。

第15話：漆黒の谷での戦い（後書き）

さて、ずいぶん長いとこ放置してしまっている絆の冒険記本編ですが……更新はもうしばらくお待ちください（汗）。

このコラボ番外編は、あと1・2回の更新で完結できると思います。

セナ

「作者、この後もコラボ予定があるんだよね？」

そうっす！

私が一番最初に『いつかコラボやりましょう』と約束した、仲のよい作者様とやるので、もうワクワク……なのですが……（汗）

セナ

「なに？どしたん？」

共に、今年受験生という……orz

セナ

「あーあー（汗）」

第16話：旅の終わり 臨海の丘（前書き）

セナ

「終わりか」

ヴァイス

「なんかしみじみしちゃうな……」

今回は“臨海の丘”の風景描写に苦労しました（笑）

では、どうぞ！

第16話：旅の終わり 臨海の丘

「ひどい目にあっ たな……」

うんざりしたようすで、セナは呟く。

ドンカラスを一瞬で倒したものの、ヤミカラス達の攻撃によりダメージを受けたセナ達。

騒動が終わると“オレンの実”を食べ体力を回復。

そして、逃げるようにドンカラス達のすみかから立ち去り、“臨海の丘”へと急いでいた。

今はそれからだいぶ歩き、もうすぐこの“漆黒の谷”を抜けられそうだった。

「やっぱり、ここら辺の地域は災害が増えてるからね。気持ちがない安定なポケモンが多いんだよ」

セナに説明するのはメルだ。

一瞬、会話がつながらなくなり、その場に沈黙が訪れる。

「……ん？なんか、揺れてる？」

ふと、デルタが呟く。

そこでみんなが立ち止まると、確かに感じる小さな揺れ。

「うわっ！！」

突如激しく揺れ始めた地面に、皆の驚く声が重なる。

立っていることが困難になり、皆がしゃがみこむ。

しばらくの後に、激しい揺れもやんだ。

「ビツクリしたよ……」

「ひどい揺れだったわね」

シギとエネが口々に言う。

「よかったな、岩が崩れなくて」

高い高い、崖の頂上を見つめながら呟くホノオの声が、空間に溶けていった。

地震のせいもあってか、口数も少なく、足早に谷底を歩いた。

そしてやがて、前方に光が見えた。

「あっ、やっと抜けられる！」

暗い谷底にうんざりとしていたせいか、ヴァイスの声が弾んだ。

「わーい、急ぐぞ」

シアンが駆け出すと、皆、あとを追っていった。

「うわぁ……！」

誰からともなく、目の前に広がる風景に感動の声を漏らす。

決して高くはないが、なだらかで、広い丘。

そして、丘を覆い尽くすのは、色とりどり、形も様々の花。爽やかな海風に揺れていて、見ていると心が穏やかになる。

「お花だ、お花」

真っ先にはしゃぐのはシアンだ。

花畑にダイブすると、目を輝かせて花の観察を始めた。

「あーあ、相変わらずだなあ、アイツは」

呆れたように苦笑いして、ホノオが言う。

シアンは一応男の子だが、声や口調にお花好き……あらゆる面で、女の子らしい。

「綺麗だね、セナ」

ヴァイスが目の中の風景を見ながら、嬉しそうに話しかける。

「あぁ」

こう返事をしたが、内心は複雑だった。

(こんなに綺麗なところなのに、近くにすむポケモンが少ないのは……やっぱり、この辺りの災害のせいなんだよな……)

そう。

“臨海の丘”の周りは、災害多発地域に囲まれているのだ。

例えば先ほどの“漆黒の谷”では、しょっちゅう地震が起き、二次災害として、岩雪崩。雨が降らなくなってしまった地域もある。

“臨海の丘”の周りのそれらの地域に住んでいたポケモン達は、災害を恐れ、多くがすみかを捨てた。

先ほどのドンカラス達のように、それでも残ったポケモンもいたが、度重なる災害が彼らにストレスを与え、気持ちが不安定に。それで、別に大したことのない理由で、セナ達を襲ってきたのだ。

(なんか、もったいないな……)

そんなことを考えていると、表情が曇る。

そんなセナの様子を察したヴァイスは、彼の肩を軽くたたいた。

「いつかはこの丘も、ポケモン達の安全な遊び場になるようにしようね、セナ」

ヴァイスの笑顔を見て、思い出した。

メルに逢った日の夜、ヴァイスとセナが、2人で交わした会話。

ヴァイスの過去を聞きながら涙し、そこでセナは思ったのだ。

いつかはオイラ達が……救助隊“キズナ”が、ガイアの災害の原因を突き止めて……ガイアのポケモン達みんなを、助けられたらいいなあ。

今、目の前で、シアンが楽しげに花と遊んでいる。

そんな様子を見てみると、それも不可能じゃないかなあ　と、思った。

ふつ、とセナが笑ったのを確認すると、ヴァイスは皆に声をかけた。

「よし、みんな！！あの丘のてっぺんまで競争だあ！」

言うや否や、ヴァイスは真っ先に駆け出す。

それを見て、皆楽しげに駆け出した。

こんな子供じみた行動も、最後の　ステキな思い出になる。

別れが迫った彼らは、精一杯に今を楽しんだ。

「あつ、待てよ！」

セナが遅れて駆け出すが、花に足が絡まり、すぐに転ぶ。

結局、丘の上に到着した他のみんなは、セナが1人遅れて到着するのを笑いながら迎えたのだった。

“臨海の丘”。

その名前の通り、頂上に上ってみると美しく揺れる海が見える。

どこまでも透き通る水は、浅い海底を彩る珊瑚礁に染まっている。

しばらくその光景に目を奪われていると、突如、海の上の空間を、淡いピンクの光が裂き、大きなポケモンが現れた。

体は紫掛かった白色で、両肩には真珠を思わせる球体が。セナ達の前に現れたのは、空間の神と呼ばれるポケモン、パルキアだった。

そして、その肩に乗っている緑色の、トカゲのような容姿のポケモンを見ると、デルタ、シギ、エネが声をそろえて言った。

「ジュプトル！」

そう。それこそがその、緑色のポケモンの名前だ。

「やっと見つけた……デルタ」

ジュプトルのその言葉から判断すると、どうやらデルタ達とこのジュプトルは知り合いのようだ。

パルキアがこちらに向かってくる。

その姿を見て、ホノオは呆然と言葉を漏らした。

「あれが……ネイティオの言っていた、“デルタ達を待つもの”……」

その言葉に、ハツとするセナ達。

彼らが来たということは、ここで、お別れ。

デルタ、シギ、エネと、ジュプトル、パルキアが言葉を交わすのを、名残惜しそうに眺めた。

すると、デルタ達3人がぐるりとこちらを向き、笑顔を見せた。

つられて笑顔になる、セナ、ヴァイス、ホノオ、シアン、そしてメル。

「アタイ達が力になれるのは、ここまでだよ。元の世界に帰っても、頑張るんだよ」

メルの言葉に、答えたのはエネだ。

「はい！メルさん、色々とお世話になりました」

「構わないさ！」

サバサバと答えるメル。

別れの雰囲気、少しばかり重くなくなった。

「元気でね、みんな」

シギの言葉に、答えたのはヴァイス。

「シギも……みんなもね」

どこかしんみりする2人。
そんな雰囲気緩和したのは……。

「なんだよ！お前らしんみりしちゃってさ。オイラ見習って、明るく明るく」

セナだ。彼とて寂しい訳ではないのだが、明るく振る舞うのは得意なのだ。

すると、セナの言葉に、シアンが便乗する。

「そうだよ みんな、まったネ」

その間の抜けたセリフには、ホノオが突っ込む。

「お前は“明るい”というより“軽い”んだよ」

「ホノオが言えねえだろ」

「んだとチビセナーっ！」

ホノオのセリフにはセナが突っ込み、ホノオは小さなセナにのしかかる。

「あうっ！重いつての！」

じゃれあう彼らを見て、皆がやれやれと笑った。

「お取り込み中、すみません」

少しおどけて、デルタがセナとホノオに声をかけた。

やはり同じ元人間として、親しみを感じたのだろう。
最後に、彼らと話がしたかったのかもしれない。

「何aska、デルタ君？」

ホノオが言うと、セナの背中から降りた。

「サンキュー、デルタ。助かった」

セナも立ち上がると、デルタと向かい合う。

「ありがとな。セナ、ホノオ……」

やはりしんみりしてしまう、このデルタの言葉。

「うん……」

返事はしたが、もっと言いたいことがあるのに　セナはいつも、
うまくいえない。

「なんつーか、その……さ……」。

ハハハ……なんか、いざ話そうとすると、言葉って出てこないモン
だな」

今回ばかりは、ホノオも同じ。

気持ちを素直に表せる言葉が、探せない。

しばし3人が黙り込むと、パルキアが声を発した。

「色々とすまねえが、こっちも急ぎたい。そろそろお別れにするぞ」

「……分かった」

そう言うと、デルタ、シギ、エネはパルキアの元へと向かう。そして、パルキアの大きな体に乗ると、今度は高い目線からセナ達を見下ろした。

先ほどパルキアが出てきた場所　海の上には、淡いピンクの光でできた、大きな門ゲートがあった。

あそこから帰るのだろう。

そう思うと、セナとヴァイスは胸が締め付けられるような気がした。

「みんな、ありがとな！みんながいなきゃ、どうなってたことか

」

「何、暗いこと言ってるのよ！」

「そうだって！」

デルタの言葉は、エネとシギに遮られた。

その様子を見て、セナ達もどこかスッキリとした気持ちになった。

「じゃあ　」

「じゃあネ〜みんなッ

まーた会おう」

こちらではセナの言葉がシアンの軽い言葉で遮られ、その瞬間、
— 気に空気が冷めた。

「こんのクソペンギン！！たまには空気読めっての！！！」

ホノオはその手に熱い炎を宿らせ、シアンに“炎のパンチ”を当て

「はいはい、アンタもアンタだよ？」

られなかった。

メルが“冷凍パンチ”のスタンバイをしたとたん、ホノオもシアンも、ギョツとしておとなしくなった。

セナとヴァイスは、その様子を見てアハハと笑うと、今度は互いに顔を見合わせ、クスリと笑う。

「じゃあ……な」

「元気でな、みんな」

デルタが言うと、セナが答える。

そのやりとりが終わると、とうとうこの時が来た。
パルキアがぐるりと後ろを向き、ピンクの光の門へと向かう。

「また会えたら会いに来る！絶対に」

最後にデルタが残した、力強い言葉。

「ああ、また来いよーっ！」

「頑張つてねー！」

「ミュウツーに負けんなーっ！」

「シアンのこと、忘れないでネー！」

セナ、ヴァイス、ホノオ、シアンが、口々に叫ぶ。

メルはただ、笑みを浮かべて、その光景を見送る。

セナ達4人の声がしつかりデルタ、シギ、エネの3人に届くと、パルキアが門をくぐり

フツと、門が消え、デルタ達の姿もなくなる。

セナ達はしばし無言で門があった空を見上げ、穏やかな波の音だけが、“臨海の丘”を包み込むのだった。

第16話：旅の終わり

臨海の丘（後書き）

セナ

「終わったな……」

ヴァイス

「寂しくなるね……」

うーん、おそらくキミ達が経験する、最初のお別れでしょうからね
え……

メル

「ま、クヨクヨしたってしよーがない。次に進むんだよ！」

シアン

「そーだよ」

ホノオ

「シアンの言葉は何故かいつも心に響かないw」

とにかく、プラネットさん、コラボありがとうございました〜！

次回でこの番外編も最終回です！

セナ

「え、今回じゃないんだ？」

最終話：オイラの探険録（前書き）

今回で最終回……。

そして、私初の試みです。

今回のお話はセナ視点です（笑）！

セナ

「え……（汗）」

ヴァイス

「主人公なのに、何気に初めてという……（笑）」

ホノオ

「オレ視点の話はすでに存在するけどな」

シアン

「ああ、2、3ヶ月放置されてる、あの初代番外編ネツ（笑）」

ホノオ

「（笑）」とか言うなし……（泣）」

では、ホノオは置いていて、いってみましょう！

最終話：オイラの探険録

あれから　デルタ達と別れてから、一週間くらい経った。

オイラ達“キズナ”は、旅から“はるかぜ広場”に戻ってくると、またいつも通りに救助隊活動を始めた。

今は、今日の依頼　お尋ね者の、泥棒リングマを捕まえる依頼を終えて、オイラ達の基地“サメハダ岩”で、4人で夕ご飯のリングゴを食べている。

「そついえばさあ」

話し始めたのはヴァイスだ。

「デルタ達とお別れしてから、ずいぶん経ったよね」

その言葉に答えたのはホノオ。

「そうかあー？まだ一週間しか経ってねえぞ？」

「だからあ、一週間も経ったんだなって思ってさ」

もう、一週間経った。

まだ、一週間しか経っていない。

時間の感じ方って、こうも違うんだな、って、なんかしみじみと考えた。

思えば、デルタ達との冒険では、いろいろな事を学んだな。

長かったような、短かったような、オイラ達の冒険。

でも、きっとデルタ達は、もっともっと、長い冒険をしてきたんだろっなあ。

そういえば、“ポケモン”……。

奴は、オイラ達の今回の冒険を見てるって言ったけど

「セナ？」

ヴァイスの呼びかけによって、オイラの考えはそこで遮断された。

「もーっ、セナってばまたぼーっとしちやってさあ」

どうやら、考え事をしていて、リンゴを食べる手が止まっていたらしい。

オイラの悪い癖だ。

いつもは食べるのが早いから、なんか考えてたってコトがすぐにはれちまう。

「なーに考えてたん？妄想か？」

ニヤニヤしながらホノオが聞く。

「あのさあ、お前じゃないんだからさ」

オイラはため息混じりに言うと、リンゴにかじりついた。

「じゃあ何考えてたノ？教えて教えて〜」

別に大したことじゃないのになあ。

シアンの言葉に、少し困った。

ふと、ヴァイスの顔を見てみると、心配そうな、切なそうな眼差しが突き刺さる。

いつもオイラ、何かと独りで抱え込んでしまっからなあ。

ヴァイスが心配するのも無理ないけど。

またまた、困った。

「えーとさ……」

ここで沈黙すると、ヴァイスにうるさく言われそうだと、とりあえず何かしら喋ろうと、言葉を漏らす。

「あの子……」

なんて言えば良いんだろう？

別に何を考えていた訳でもなかったから、本当に困った。

「こっ、これからも救助隊活動がんばろうな……」

どうしてとっさにこんな言葉が出てきたんだろう？

しかも、リンゴを見ながら言うなんて……。

一瞬の沈黙。

そりゃそうだよなあ。
いきなりこんな事言い出す奴って、変だよな。

「……ふふっ」

ヴァイスが吹き出し、沈黙を破る。

ん？

「アハハ！！セナ可愛い〜！」

どうして、笑われなきゃなんないんだろう？

オイラがポカンとしてると、ホノオとシアンも笑い出す。

「あんなに心配させといて、それだけナノ〜？」

「そんなに言うのに苦労する言葉かよ、それ！？」

そっちが勝手に心配しただけだろう？

そう言葉にしたかったが、顔が熱くなるのを感じる。

何も、言えない。

「あはっ！セナ、照れるからなかなか言えなかったんだよ！！」

そんなオイラを指差して、ヴァイスはホノオとシアンに解説を。

「ち、ちが」

「相変わらずだな、お前は！」

「もう、セナらしいネッ」

言葉を遮られる。

なんでオイラはあんな事を
激しく後悔。

「もう、いい……」

そう呟くと、リンゴを勢いよく食べ始める。
今のオイラとリンゴ、どっちが赤いのかな？
知りたくもないが。

でも、オイラが言っちゃったこと『これからも救助隊活動が
ばろうな』。
偽りの言葉じゃ、ないんだよな。

オイラが恥ずかしさを紛らわすためにガツガツとリンゴを食べてる
姿を、ヴァイスとホノオとシアンはニヤニヤとしながら眺めてる。

本当に、カツコ悪いリーダーだな。
いつも思ってるけど、今日も、そう思った。

その日も終わり、やがてみんなが眠りにつく。

ヴァイスの寝息、ホノオのいびき、そしてシアンの寝言……。
みんなもう寝たみたいだけど、またまたオイラは考え事を。

“ポケモン”のことだった。

さつき、ヴァイスに考えを邪魔されてから、すっかり忘れてたんだけど、また、思い出した。

“ポケモン”。

人間を憎んでいる、アイツ。

オイラも、“偽善者”だの何だの罵られたけど　オイラ達の冒険を見て、少しでも人間を好きになってくれたらいいな。

少しずつ、眠くなる。

どこにいるかも分からない、真の姿も知らない“ポケモン”に向けて、心の中で話しかけてみた。

“ポケモン”。

まだ、オイラ達人間のこと、嫌いかな？

少しでも好きになってくれていれば嬉しいけど、別に、まだ大嫌いでもいいや。

オイラ達“キズナ”の冒険は、きっとまだこれからだ。

だから、お前と話す機会だって、まだまだあるだろうから。

オイラは、強くなんかないし、ちっぽけだし、カッコ悪いリーダーだよ。

でも、とにかくオイラ、頑張るよ。

みんなと、一緒に。

決して口には出せないような、そんなことを考えていると、なぜだかまた恥ずかしくなった。

そして、何も考えないように、ただただ呼吸を繰り返していると、とうとう眠気が。

明日からも、頑張ろう。

最後に考えたのは、具体性にかけていて、でもオイラの気持ちがいもった、そんな一言だった。

最終話：オイラの探険録（後書き）

さて、これで、この『キズナの探険録〜隠された闇の丘』はおしまいです。

『絆の冒険記』の番外編で、しかもあちら様と大差ないストーリーだったのですが、毎度意外と多くの方に読んで頂けて、もう感謝感激でした！

読者の皆様のお陰でやりがいもありましたし、本当に、ありがとうございます。ございました。

飽きっぽい私にとって、こうして一つの作品を完成させられたことは非常に大きなことではないかと思えます（笑）

もう受験生になる私ですが、この調子で『絆の冒険記』本編も頑張っていきたいです！

セナ

「では、最後にもいちど……。」

読者様、今までこの小説を読んでくださって、本当にありがとうございます。ございました〜！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4040i/>

キズナの探険録～隠された闇の丘～

2011年1月22日22時28分発行